

「磁都」景德鎮の産業・生活事情：景德鎮・上海 の視察訪問と比較考察をふまえて

著者	十名 直喜
雑誌名	研究年報
号	15
ページ	25-82
発行年	2002-12-30
URL	http://doi.org/10.15012/00000858

「磁都」景德鎮の産業・生活事情

——景德鎮・上海の視察訪問と比較考察をふまえて——

十 名 直 喜

目次

1. はじめに
2. 磁都・景德鎮の歴史的位置
 - 2.1. 江西省の自然・文化風土と景德鎮
 - 2.2. 現代景德鎮の陶磁に対する評価
 - 2.3. 景德鎮のやきもの生産システム
 - 2.4. 「磁都」景德鎮にみる歴史的生命力
3. 現代景德鎮の経済・産業
 - 3.1. 輸出指向型経済の発展
 - 3.2. 総合的な陶磁器産業システムへの展開
 - 3.3. 機械・電子・科学など新興工業の台頭
 - 3.4. 豊かな農業と国際文化交流
4. 景德鎮を訪ねて
 - 4.1. 景德鎮市の街並みと暮らし
 - 4.2. 陶磁器に関わる企業・研究教育機関・名所旧跡
5. 景德鎮から上海へ
 - 5.1. 上海からみた景德鎮
 - 5.2. 上海市民の生活事情
 - 5.3. 上海に見る消費大国の予兆とその先導役
 - 5.4. 上海の新興ソフトメーカーにみる経営と熱気
6. おわりに

1. はじめに

china といえば磁器 (porcelain の日常語) を指すように、3千年のやきものの歴史をもつ中国は、世界の「やきものの故郷」ともいわれる。その中国にお

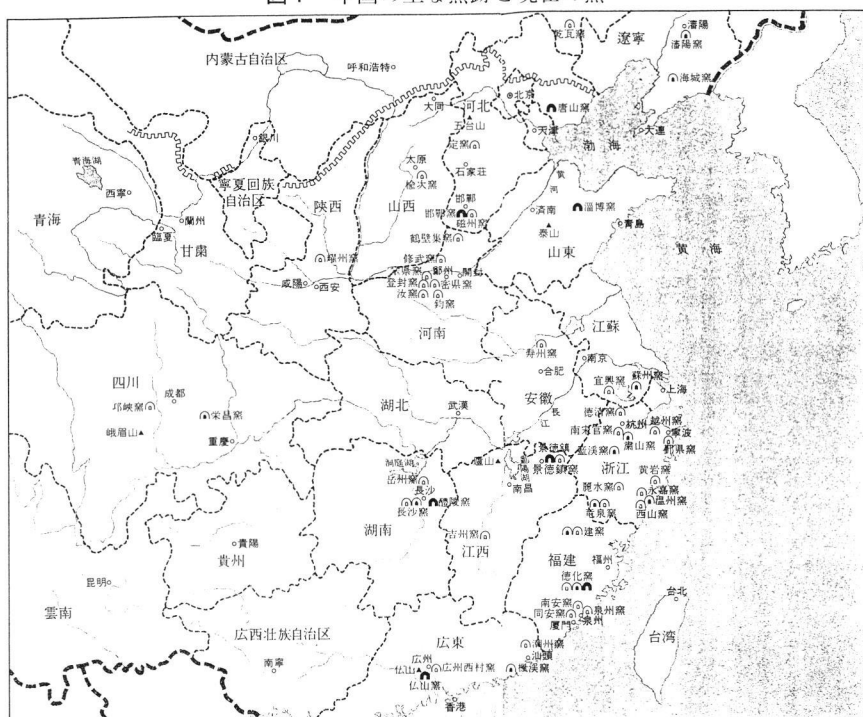
いて、「磁都」と呼ばれるのが景德鎮である。2千年のやきものの歴史をもち、1千年にわたりやきもののメッカとして世界各地に生産品を輸出し続けてきた。

一方、景德鎮市と友好提携関係をもつ瀬戸市は、陶磁器製品全般を指す「せともの」という言葉の発祥の地であり、「陶都」と呼ばれるように1,300年のやきものの歴史をもち「日本のやきものの故郷」である。奈良時代の中頃、日本で初めて高火度焼成の施釉陶を開発して以降、多少の浮沈はありながらも、日本のやきものの中心であった。

景德鎮と瀬戸のやきものの産業には、共通する特徴も少なくないが、特に原料と分業システムが注目される。中国の磁器を生み出した素晴らしい磁土、カオリンの名は、景德鎮の郊外にある高嶺山こうりょう（の磁土）がなまったものといわれる。景德鎮のカオリンに匹敵するとみられるのが、木節粘土きぶしと蛙目粘土がいろめという瀬戸が産出する良質の2大陶土である。中国とくに景德鎮では徹底した分業システムが歴史的に発達したが、近代瀬戸においても地域全体に精度の高い分業形態が歯車のようにかみ合うやきものの産業の社会的分業システムが特徴をなした。

瀬戸商工会議所の主催による景德鎮視察交流団の一員として、筆者は2002年5月に景德鎮および上海を視察訪問する機会に恵まれた。専門的な知識はもとより事前準備も殆どないまま参加したが、「百聞は一見に如かず」というか実に興味深い視察体験を味わうことができた。景德鎮では、陶磁器産業関係者との交流、大学や企業、名所旧跡などの見学を通して、前近代と現代が混交しながら発展するダイナミズムを肌で感じる。また、中国の最新都市、上海では景德鎮との労働、生活、街並みのあまりの落差に新鮮な驚きを禁じえず、むしろ両都市の比較観察を通して現代中国の多様な側面に接する機会となった。上海をはじめ現代中国に関する情報はあふれているが、現代の景德鎮を分析した資料は意外と見当たらない。帰国して数ヶ月経過して記憶も薄れる中、このことに気付いたのは夏休みに入ってからである。小論は、当時の見学メモや現地で見つけた資料、帰国後に入手できた資料をもとにして、現代の景德鎮についてやきものや生活、街並みの視点から、また上海との比較視点からまとめたものである。

図1 中国の主な窯跡と現在の窯



出所：陳舜臣『景德鎮の旅—中国やきもの紀行—』

講談社文庫，1991年

○ 古窯跡
● 新窯跡
■ 現在の窯

2. 磁都・景德鎮の歴史的位置

2.1. 江西省の自然・文化風土と景德鎮

やきもののまち景德鎮市は、江西省の北東部にある(図1)。江西省の面積は、16万平方キロメートルで日本の4割以上に当たる。中国の行政単位は、省の下にいくつかの地区があり、その下に市や県があるが、大きな市は地区と同格である。江西省には省都の南昌市をはじめ8つの市があり、景德鎮もそのうちの一つである。

江西省と聞けば、景德鎮のやきものの他に、むしろ詩文や革命などを思い浮

かべるかもしれない。江西省の北部、鄱陽湖^{はようこ}と長江（揚子江）の交わるあたりに、蘆山^{ろざん}という名山がある。蘆山の麓にある九江市一帯に、詩人陶淵明の故郷がある。陶淵明以降、あまたの文人が蘆山に来て詩文をつくったが、そのなかでもとくに有名なのが李白と白居易の二人である。

江西省の西南にある井岡山^{せいこうざん}は、中国の革命拠点として知られる。1927年8月1日、朱徳や周恩来たちによって指導された3万の革命軍が、わずか3時間で南昌を占領し、南昌市に革命委員会が成立した。この蜂起軍は北伐の途中、国民党の激しい攻撃をうけ、その一部は井岡山に合流する。中国の人民解放軍は、この8月1日を建軍記念日にしている。

江西南昌は、17世紀の天才画人、八大山人の生まれた場所でもある。彼はあざやかな個性の持ち主で、それを絵画に表現した。中国の芸術史上でも稀有の人物を、江西の風土が生んだといわれる⁽¹⁾。

江西省の最北端に接する安徽省の最南端の徽州地区^{あんき}は、黄山^{こうざん}の南にあり、優れた画人を輩出した風雅の地として知られる。東山魁夷も訪れて描いた黄山は、古来、中国絵画の重要なテーマの一つになっている⁽²⁾。

景德鎮がやきもののまちとなったのは、高嶺という山と昌江という河のおかげである。市街を流れる昌江を北へ遡ると高嶺山がある。そこには無尽蔵の良質原料があり、つくられた製品は河によって鄱陽湖を経由し長江という大動脈につながる⁽³⁾。

景德鎮という地名の由来は、景德という宋代の元号（1004-7年）からきている。それまで昌南という地名であったが、北宋3代目皇帝真宗（968-1022年）時代の景德年間に、朝廷へ献納する磁器の底に「景德年製」の4字をいれるように命ぜられたのが始まりといわれる。景德という名は、許可をうけたか、あるいは下賜されたものとみられる⁽⁴⁾。

2.2. 現代景德鎮の陶磁に対する評価

景德鎮の現代陶磁に対する評価には、概して厳しいものが少なくない。そのきわめつけとして、加藤卓男の次のような評価がみられる⁽⁵⁾。「先年、私は景德鎮を訪れてびっくりした。美術館の最後の部屋に現代陶磁が並んでいたが、見

るに堪えない作品のオンパレードだった。梅の一枝を描いても、微に入り細をうがって描かれているが、絵が巧妙すぎて、絵画としてみるべきかどうかが判然せず、どっちつかずになっている。」

三杉隆敏も1983年の景德鎮訪問記で、辛らつな批評を放っている⁽⁶⁾。「ここで非常に自慢して案内して見せてくれるのは細密画風の絵付け、脱胎とよぶ薄作り、あたかも象牙細工のような透かし彫りの龍頭船など技法の極地ではあるが、芸術的にはなんら認めるべきものではなかった。」

技術と芸術の問題

「遠い昔にどうして、このような現代人の目から見ても素晴らしい造型の作品が生れたのであろうか」。世界各地の古窯址を発掘してきた加藤卓男は、こうした謎（不思議な感慨）にとらわれ、それを解きほぐす鍵は「技術と芸術の問題」にあるとの見解に至る⁽⁷⁾。その視点はまた、景德鎮にみる過去と現在の落差を解きほぐす鍵にもなるに違いない。

芸術は、本質的に美的価値の創造を目的とする。やきものをつくる場合、その材質、形状、文様、焼成などについて、まず構想を練ることから始まる。技術は、この発想・構想を支援して、どのような芸術的価値を生み出すかといった際の下働きの役割を果たす。工芸とは技術のイメージ化であり、よき技術なくしてよい工芸制作はできない。工芸にとっては、技術の練磨が何より大切である。

近代以前においては、技術と芸術は不可分の一体関係にあったが、近代化のプロセスで両者の分離が進行する。日進月歩の科学・技術に基づく現代の工業システムでは、進歩がすべてである。ところが、保守的・個性的な性格を持つ芸術は、本質的に手工業的であり、工業システムとの乖離は広がる一方にある。

2.3. 景德鎮のやきもの生産システム

徹底した分業システム

中国のやきもの生産の特徴として、まず徹底した分業主義をあげることができる。瓷石を切り出す人、それを粉碎する人、泥状にする人、輸送する人、型をつくる人、ロクロをまわす人、胎土を削る人、燃料の木を切る人、それを乾

燥させる人、窯の火加減をみる人、絵付をする人、検査をする人、梱包する人、顔料をつくる人、釉薬を調合する人など、キリがないほど分業化されている。例えば、明朝の16世紀中期に、景德鎮では「23作」という分業制度があって、宮廷用の最高のやきものを焼く官窯の御器廠では、389人が23の工程に配置されていたことが記されている⁽⁸⁾。

材料の土作りにあたる人はそれだけで一生を送る。ロクロを挽く人は、毎日ロクロを挽いている。目をつむってもほとんど同じ形、寸法のものが作れるとといった正確さがある。絵付匠は同じ絵を朝から晩まで描いているので、自然と現れるリズム感がある。窯を焚く人は窯の中の火色を見、火のはぜ具合で温度を知り、窯の中の熱をコンピュータで制御しているかのように心得て、火の色とともに一生を送った。

景德鎮では、日本のようにある巨匠の作品だというだけで、べらぼうに高くなるということはない。やきものは細分化された作業の合作で、一つのやきものが誰の作品であるか厳密にはいえないからである。「合作」という観念が骨の髄までこびりついている⁽⁹⁾。

職人の移動もあり、優秀な人を集めることも可能であった。沈懷清の『窯民行』という詩に、「景德は佳瓷を産む 器を産むも手を産まず 工匠は八方より来たり」とある。つくり手は、八方より景德鎮にやってくるのである。彫塑師は福建省から、窯の火加減をみる人は（景德鎮から百キロほど西の）都昌県から、型をつくる職人は（南昌市の南約60キロ）豊城県からの出身者が多かった⁽¹⁰⁾。

この徹底した分業主義、そして作業内での強い団結が、「景德鎮をひきしめてきた」といわれる。清の乾隆帝（1736-95年）末期から、景德鎮で罷工（ストライキ）が始まるが、画工や梱包作業員のリーダーはすべて虐殺され、ストライキは鎮圧された。それ以来、梱包の人は白い作業衣を着けて仕事をするようになったという。虐殺された指導者を悼み、喪服の代わりにそのような作業衣を使うようになったが、同士の愛の強さがうかがわれる。内部だけでなく、梱包部門の人は輸送部門の人たちと極めて近いつながりをもつなど、横との連帯意識も強烈なものがあった。太平天国戦争（1850-64年）に参加した陶工軍が、無

類の強さをみせたのは、そのような団結の力が戦場に発揮されたためともみられる⁽¹¹⁾。徹底した分業に基づく大量生産システムの思想は、20世紀初頭の米国を想起させるものがある。

官窯制度

中国で良いやきものが作られた背景には、官窯の制度もあげられる。宋時代になると、朝廷が直轄する窯ができ、宮廷使用品を献上することも始まり、開封（北宋の都）や杭州（南宋の都）では、良い土と熟練した陶工を官窯に集めて質の高い青磁を焼くようになった。景德年間（1004-7年）に、宋朝は江西省の饒州ぎょうしゅう窯とよばれていた窯に宮廷使用品を焼くように命じた。それ以後、この窯は「景德鎮窯」を名乗り、元、明、清時代と官窯がここに置かれ、世界に誇る中国磁器の最高級品が生産されるようになった⁽¹²⁾。

2.4. 「磁都」景德鎮にみる歴史的生命力

中国の陶磁器は、長い歴史をもち広い地域の各地で焼かれたが、何れの窯にも盛衰がある。例えば、宋時代に河北省の定窯で焼かれた白磁は、中国陶磁史上、最高のもの一つであったといわれる。また、宋時代から元、そして明時代の初期へ、ちょうど12世紀から16世紀の中期まで青磁ばかり焼いていた浙江省の龍泉窯も、国内のみならず中近東からインド、東南アジア、朝鮮半島、日本に天文学的な輸出をしていた。その他にもいろいろな窯があり、ある時期、非常に良いやきものを産出するも、いつしか衰退し、廃業になってしまうものが多い。

景德鎮は歴史上、戦乱でなんとか窯基をことごとく破壊されたが、そのたびごとに甦ってきた。明末の「三藩の乱」で（1674年）、また清末の太平天国戦争では1853年に清軍が景德鎮を退去する時、窯基を破壊した。窯を残しておく、その操業によって太平天国軍が軍費を稼ぐ恐れがあったからである。しかし、窯などはその気にさえなればいくらかでも築くことができる。問題は「時代」、「人心」であるという。時代が上昇の時にあり、人心が奮い立っている時、回復のスピードは早い⁽¹³⁾。

こうして景德鎮は、多少の変化や断絶があったにせよ、宋時代の白磁、元時

代の染付、明時代の色絵（中国では五彩と呼びカラフルなもの）と続く。さらに、清朝では、それまでのあらゆる種類の技法を駆使し、さらには粉彩、珐瑯彩や銅紅釉系の新しい技法を発展させた。以降、20世紀に至っても、やきもの生産は少しも衰えず国内だけでなく海外の需要にも応え続けている。世界的にみても、このようにやきものの町として1,000年にわたり連綿と窯の火を消すこともなく、しかも世界各地に生産品を輸出し続けている窯は、景德鎮の他には見当たらないとみられる⁽¹⁴⁾。

中国の磁器が世界の貴重品として喜ばれたのは、初めてカオリンという磁土を見つけ、それを1,300℃という高熱で焼成したことによる。カオリンという名称は、景德鎮の郊外の高嶺山こうりょうでこの磁土が見つかりその名がなまったこと由来する。「白きこと玉の如し、明きこと鏡の如し、薄きこと紙の如し、その声けいの如し」⁽¹⁵⁾といわれた景德鎮の磁器は、「水、土が陶磁器に適している」自然条件が技術や人材、市場などと結びつくなかで可能となったものである。今もその良質の磁土が採掘できるという豊かな資源こそ、今なお世界の磁器センターであり続けられる理由の一つに他ならない。

3. 現代景德鎮の経済・産業

3.1. 輸出指向型経済の発展

景德鎮は、面積5,248平方キロメートル、人口142.3万人（1991年は132万人）の江西省直轄都市で、ある。1940年代後半の景德鎮は、手工芸的な陶磁器産業だけの町であった。しかし、1949年以降の数十年間にわたる発展により、陶磁器産業を中心とする幅広い産業システムを有する新しい型の都市に変貌している。

近年における開放改革政策は、景德鎮の経済力を強め発展を促してきた。1991年には、市のGNPは2兆860億元、国民収入1兆8,010億元、工業・農業生産額3兆7,290億元に達し、1978年に比べてそれぞれ2.35、2.82、2.42倍に伸びている。陶磁器産業は、現在の多様な産業構造形成において主導的な役割を發揮し、新規の機械・電子・化学・エネルギー・建築材料産業をよく発達した適

正規模産業への展開を促している。陶磁器生産については、日用品など伝統的な製品に加えて、衛生・工業・電子用陶磁器生産を急速に発展させ、幅広い陶磁器産業複合体を形成して内外市場への供給を保証している。景德鎮は、陶磁器製品だけでなくその他産業生産物も輸出するユニークな輸出志向型経済構造を育ててきた。各産業に占める輸出利益は、陶磁器 1/3、電子製品 1/4、食品(お茶が主体)3/5 に達する。近年では、私営企業や外資企業、外資提携企業が急速に発展してきている⁽¹⁶⁾。

3.2. 総合的な陶磁器産業システムへの展開

1949 年に新しい発展のスタートを切った景德鎮の陶磁器産業は、1950 年代における技術革命と 80 年代に始まった市の経済改革により、生産や経営、哲学に影響を受け新分野を開拓して、日用品から建築・衛生、特殊工業用に至る総合的な陶磁器産業システムへと発展してきた。

景德鎮には、約 150 の大・中・小規模にわたる陶磁器工場がある。磁器生産が大半であるが、原料探査や鉱山採掘、陶磁器機械、耐火物、材料化学など多岐にわたり、約 3 千人に及ぶ様々な科学・技術専門家と多くの陶磁器熟練技能者が活躍している。「景德鎮陶瓷学院」は、中国唯一の陶磁器専門大学である。中国軽工業部陶瓷研究所は、陶磁器研究や標準検査、情報資料での傑出した能力で知られる。さらには、江西省陶瓷研究所、景德鎮古陶瓷研究所も擁し、景德鎮は中国の「シリコンバレー」ともいわれる。

第 6、7 次 5 ヶ年計画の間、陶磁器の技術革新は、海外の最新設備を輸入し先進技術を吸収して進められ、陶磁器生産設備を完成させ輸出を拡大する。1 次エネルギー供給と大気汚染防止を図るために、コークス・ガス工場が設置された。

今日、景德鎮の輸出用陶磁器は、13 種類で 200 以上の系列、1 千以上の型、3 千以上のペインティングから成り、国内はもとより 120 カ国以上に輸出されている。1979～91 年の間に、国際賞では金賞 25、銀賞 6、銅賞 3、国家賞では金賞 8、銀賞 4、銅賞 3 など多くの賞を獲得している。高品質、高価格水準かつ広範囲の販売は、中国陶磁器産業における景德鎮の主導的地位を強化してき

た。

建築・衛生・工業用陶磁器は、景德鎮の陶磁器産業構造における重要な構成部分である。1991年におけるタイル生産量は499万平方メートルで、陶磁器の高電圧生産は4,874トンである。さらに、衛生、紡織、鋳型磁器製品の生産は、より高い比率になっている。この生産能力は、中国の衛生家具工場の主要建設計画が達成されると一層強力になるとみられる。科学、技術、社会の発展に伴い、景德鎮の陶磁器産業は伝統的な生産手法を突破して新時代に突入している。この古い磁都において、構造・圧電・媒体・高頻度用やその他の特殊用を含む陶磁器製品は、電子工学や航空・薬品分野に応用されている⁽¹⁷⁾。

3.3. 機械・電子・化学など新興工業の台頭

景德鎮は、陶磁器産業をさらに発展させつつ新工業領域を開拓し、江西省における総合的な工業基地になっている。

機械工業が飛躍的に発展したのは、昌河飛行機工場が巨大なヘリコプターやミニバス、リムジンの生産を開始した時である。それらの輸送車は、今やベストセラー商品である。新しく台頭してきた華意電器総公司是、年産30万台の冷蔵庫、10万台のエアコンを生産する。その製品は、省および軽工業部から表彰を受け、香港やマカオ、東南アジア諸国を含む内外市場でよく売れている。景德鎮でつくられる船外機、避雷機、木工電機、印刷機械は、国内で先進レベルにあり市場競争力を持っている。

電子工業は、急速に発展して中国の生産基地を形成している。ほとんど全ての部品（電気抵抗器と完成機器を除く）を生産し、その生産・販売・利益額は江西省の26%、25%、30%を占め、1,560種類に及ぶ軍需・民需用計器やカセットレコーダー、コンピュータ、電子時計、行政通信機器、ワイアレス計測機器などを含んでいる。国家先端科学研究や重点軍事工程に部品を供給できるように、多くの製造メーカは国内市場で主要な地位を占め、党中央委員会や国務院、中央軍事委員会から推薦を受けている。その一部は輸出され、毎年1千万米\$以上の利益を稼ぐ。

適正規模にある化学工業は、多様な種類の生産物を供給している。薬品工業

は、化学製剤や総合漢方薬、畜用薬品、生物性薬品など110種類以上の薬品を供給する。化学原料の工場では、硫酸や苛性ソーダ、サルファ剤、ガス、コークス、カルシウムカーバイド、短塩化ビニール繊維、PVCなど28種類以上が生産される。化学工場における転写紙、液状金、顔料の生産では、全国総生産量の25%、30%、35%を占めている。また、化学肥料やゴム、林産化学品も生産している。その他、食品、衣服、包装、採鋇などの工業も急速に発展している⁽¹⁸⁾。

3.4. 豊かな農業と国際文化交流

景德鎮は、気候温和で、適度な雨量、肥沃な田野、豊かな森林に恵まれた亜熱帯地帯にあり、その有利な地理環境は、農業経済の発展をもたらしてきた。

農業に従事する人口は88.44万人、耕地は96万畝ある。主要穀物は米で、年産450万トン、その他に綿花、油菜、ピーナッツ、サトウキビ、野菜、ラミーなどを産出する。地域の45%を占める森林の面積は530万畝で、そのうち119万畝は人工林である。毎年、3-4万立方メートルの木材が国に供出される。副産物としては、茸類やロジン、桐油、生漆などがある。牧畜業は養豚が主で、2つの養豚場が大量の痩せ豚肉を輸出している。水産養殖場は84千畝に上る。大量の桃、梨、オレンジ、栗が果樹園で作られ、数千エーカーの桑畑を持つ養蚕業は拡大している。都市近郊に位置するという地理的な有利さと豊かな地域資源は、町村からの労働力と結びついて、郷鎮企業の急速な発展を可能にした。彼らは8万人以上を数え、陶磁器や採鋇、建築材料、木材加工、電子機械、衣服など30以上の産業に従事している。

茶、高品質米、痩せ型豚肉、茸類、米製ワインなどの農産物を輸出している。「浮紅」茶は、中国最上の茶と評価され、毎年2千トン輸出されている。20世紀初めのパナマ国際博覧会で金賞を獲得し、近年にも外国貿易部、商業部および省から多くの優秀賞を受賞している。緑茶もすばらしい。「浮瑤仙芝」と名付けられた緑茶は、1991年に（茶の生産で有名な都市）杭州で開催された国際茶文化祭で、中国の有名茶に推薦された。「浮紅」茶の輸出を拡大するために、日本企業との合弁会社「洪源茶葉有限公司」をつくり、1992年5月から100%輸出向けに生産している⁽¹⁹⁾。

景德鎮は、中国の都市の中でも国際文化交流では第一の実績をもつ。景德鎮でつくられた陶磁器は、数百年間にわたり、「シルクロード」を経由して世界中を巡ってきた。中華人民共和国の建設以来、とりわけ改革開放政策以降、景德鎮の外国貿易は目覚しく発展し、陶磁器輸出の増加以外にも、茶、薬用原料、家庭電化製品、衣料などは今や国際市場を占有し始めている。1991年の外貨獲得は8千万米ドルに達した。景德鎮は現在、100以上の国・地域と協力関係にあり、江西省における世界への重要な窓口になっている。重要な輸出品としての陶磁器製品は、最近10年間に3千万米ドルの利益を稼ぎ、中国の陶磁器経営における主導的な地位を確保している。日用および装飾用の磁器製品の他に、重要な輸出品には電子製品および茶がある。茶は年産2千トンでその素晴らしい品質、独特の芳香、美しい色は世界的に有名である。近年、景德鎮では先進技術、設備、緊欠原料の輸入が増加している。

開放政策のもと、景德鎮は、陶磁器への高い評価を利用して他の諸国との文化交流を一層活発化している。景德鎮からの派遣団は、世界中を訪問して、磁器製品の展示や磁器生産技術の実演を行い、陶磁器に関する国際的な学術会議を開催し、さらには外国企業パートナーと相互訪問している。1990年以来、景德鎮では陶磁器祭りが毎年行われ、他の諸国との文化・経済・技術の協調関係を強めている⁽²⁰⁾。

4. 景德鎮を訪ねて

4.1. 景德鎮市の街並みと暮らし

4.1.1. 破壊からの復興

陳舜臣によると、景德鎮には「遺跡らしいものはほとんどない」という。19世紀後半の太平天国戦争の時、景德鎮のまちは破壊し尽くされたからである。戦闘による破壊ではなく、景德鎮の労働者が太平天国に加担したのに対する、清朝政府の報復的な破壊だったといわれている⁽²¹⁾。荒廃した景德鎮は、官窯より先に民窯が復興する。アヘン戦争後に締結した南京条約により、上海が開港され、その居留地に住む外国商人らが貿易品として景德鎮のやきものを

求めたからである。その注文はきまったように、「康熙・雍正・乾隆期のようなもの」で、景德鎮の復興は清の全盛期の仿古から始まったのである。

清初の復興期の景德鎮も、明朝の万暦以前にみられる技法の再興が最大の課題であった。それが、康熙・雍正・乾隆という清の全盛期には、その課題を達成したばかりか、それ以上の成果をあげたのである。景德鎮は技術至上主義であった。技術は精巧の極地を求める。こうした、ますます精巧を求めるという清の全盛期の姿勢は、今日まで受け継がれているようである⁽²²⁾。

4.1.2. 1980 年前後の景德鎮

1976 年に景德鎮を訪れた瀬戸市の友好訪中団によると、「市民の生活ぶりは、戦後間もなくの日本の様子を見るよう」だったという。

その 2 年後の 1978 年に景德鎮を訪れた陳舜臣は、古びた街並みの状況の目を凝らす。「昌江と高嶺の間を縫うようにして、自動車は景德鎮のまちに入りました。……古びているけれども、生活の息吹の感じられる家並みが続きます。車窓からみると、それも傾きながら、互いに肩を寄せ合っている感じです。日用雑貨の店、漬物の甕で間口がいっぱいの店、布靴を売る店、自転車修理の看板も見られます。……さきほどから、車窓に黒い煙が見え、ようやくやきもののまちにきたという気がしはじめていました。」⁽²³⁾

また、1983 年に景德鎮を初めて訪れた三杉隆敏は、当時の街並みの様相を次のように記している⁽²⁴⁾。「広い町には人があふれ、材料の磁土を運んでいたり、一輪車の手押し車に山と積んだやきものを押す人、また道ばたの露店市にやきものがずらりと並んだ場所もある。そして、町の中心部、幅広い道の両側はレンガ積みの高いコンクリート塀で囲まれた工場が続くという町であった。高い煙突の先から上る黒い煙は見え……働いている作業員の数はかなり多いが、工場の内部は、日本の窯業工場と比べるともっと機械化する余地のあるものであった。」

4.1.3. 2002 年の景德鎮

2002 年 5 月、瀬戸商工会議所創立 55 周年を記念しての景德鎮市視察交流団

図2 景徳鎮市の目抜き通り



出所：米本敬治氏の撮影（2002年5月）

に加わって中心市内に足をふみいれたが、まさに様変わりの様相である。市全域の広さは5,200平方キロ、総人口は150万人、盆地になっている中心市域124平方キロの人口は48万人で、市民の生活ぶりには大きな格差もみられる。市の中心部には現代的なビルが立ち並び、目抜き通りではワゴン車や乗用車が走行する間を自転車走りぬける。リヤカーや三輪車、今にもエンストしそうなボンコツトラックも見かける（図2）。しかし、一步横道に入ると、今にも朽ち果てそうな、人が住んでいるようには見えない民家などが並ぶ。レンガ積みの家

図3 レンガ積みの建物の目立つ景徳鎮市の古い街並み



出所：米本敬治氏の撮影（2002年5月）

が多く、瓦屋根の家も今にも崩れ落ちそうな重ね方である（図3）。幸い、この地方は地震がほとんどなく、60年前に建てられた家もあるという。

龍珠閣の最上階（5階）は展望台になっていて、眺望が素晴らしい。四方八方から市内を見下ろすと、新旧のアパートなどがモザイクのように混在している。清代を思わせるような古びた民家も並ぶ（図4）。古いアパートは大変貧素で窓もほとんどなく薄暗い感じがする。中央が庭になっていて、四方を建物が囲む。現地のガイド通訳によると、今も住んでいて犯罪はほとんどない。昔から住んでおり地域的なつながりもあってスラム街にはなっていない⁽²⁵⁾。

龍珠閣の最上階から10数本の高い煙突が見えるが、そのうちの2～3本から煙が上がっていた。石炭焚きのトンネル窯の煙突で、かつては800本を数えたが、今では17本になっている。環境対策のため、2002年12月末までに全てなくし、ガス窯に切り替える計画である⁽²⁶⁾。来年になると、景徳鎮市内で製陶工場の煙突がみられなくなり、街の様相も一段と変わりそうである。

工場での労働時間は、夏7.5時間、その他8時間である。昼休みは、夏3時間、その他2時間とゆったりと休憩をとっている。中国では昼寝の習慣があり、半時間から1時間ほど昼寝をするが、上海では競争が激しくなりほとんどみられない⁽²⁷⁾。

図4 龍珠閣3階から見た景德鎮市街および古い家並み



出所：愛知県陶磁器工業協同組合『景德鎮視察訪問報告書
—瀬戸市・景德鎮市友好提携記念交流事業—』1997年

目抜き通りでは、ワゴン車や乗用車が走っている間を自転車が走り抜け、またりやカーや三輪車を引く姿やボンコツのトラックなども走るなど、その交通風景は多彩で、昔懐かしい子どもの頃から今日に至る日本の数十年間の縮図をみる感がする。

許愛民景德鎮市長は、景德鎮陶瓷学院の出身（陶磁器材料専攻）で陶芸家でもある。許市長によると、同市では10年程前から新しいまちができて始め、とくにこの5～6年間に大きく変貌したとのことである。都市改造のピッチは実に手早いが、これは行政側の思い通りに進めることができるからである。スラム

図5 昔ながらの雰囲気が漂う景德鎮市の人民商店街



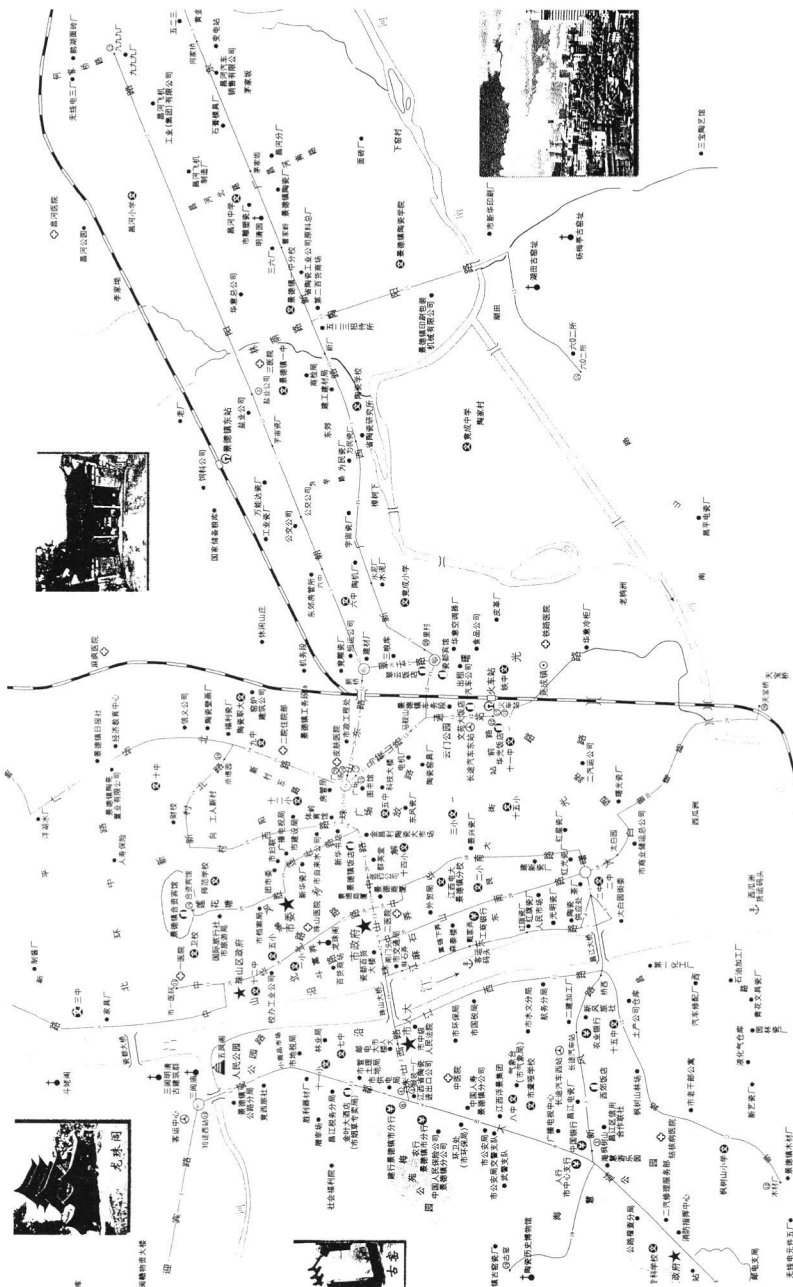
出所：米本敬治氏の撮影

化した街の住民との立ち退き交渉に1ヶ月ほどかけた後、早ければ3ヶ月、遅くとも6ヶ月以内に取り崩すといったペースで進行する。住民側にとっても、新たな高層住宅に移れる利点もあり、むしろ歓迎ムードという。「さらに都市の改築に手を入れたい。ここ数年でがらりと変わるはず。新しいまちをつくり、人民政府をそこに移したい」という。

許市長によると、景德鎮市のこれからの目標は、陶磁器産業文化の伝統を守ること、経済の中心地区になること、観光を整備することの3点である。上記の新都市計画も、中国内陸部の経済中心地区をめざす方策の一つに位置づけられる。高度技術開発区を建設しており、ここに国内外の企業誘致を図る一方、景德鎮市の西方には約30平方キロメートルの新都市の開発を計画しており、来年にはできあがる予定である⁽²⁸⁾。

景德鎮では、住民人口の約半分が陶磁器産業に関わっている。一般的な家庭の月収は500元（8千円）、公務員は1千元（1万6千円）程度で、陶磁器関係の技術者が最も恵まれている。しかし、景気に左右される民間企業の従業員に比べて、公務員の暮らしが最も安定しているという。人民広場はかつて汚かったが、今では噴水もできて市民の憩いの場になっている。近くの人市場街（図5）などで買い物をする、アイスクリームは1元（16円）、ケンタッキーのコー

図6 景徳鎮市の中心部の地図



ヒーは4元(64円)、革靴は65元(1,040円)だった⁽²⁹⁾。2002年5月初めには、初のファーストフード店としてケンタッキーフライドチキンが開店し、若者らで結構な賑わいをみせていた。

4.2. 陶磁器に関わる企業・大学・名所旧跡

「磁都」と呼ばれ陶磁器の聖地ともみなされる景德鎮は、陶磁器に関わる代表的な企業、研究教育機関、歴史観光名所などを擁する世界的に有名な歴史文化都市である(図6)。景德鎮陶瓷学院は、中国で唯一の陶磁器専門大学である。長い陶磁器生産の歴史をもつゆえに、陶磁器に関わる興味深い名所旧跡を多彩に提供している。有名な湖田古窯跡の他に、郊外には高嶺村があり、山や水に囲まれ美しい自然観光名所で、観光客の関心が高い。英語名ではカオリンとよばれる最良の磁土、高嶺土にちなんで名付けられた高嶺村は、多くの陶磁器考古学者や鑑定家を引き付けている。陶瓷歴史博覧区域にある古窯瓷廠と呼ばれる窯場では、磁器生産の伝統的な職人技を見せるが、その魅力にとりつかれそれを真似して昔のロクロでの磁器づくりに挑戦する訪問者が多いという。陶瓷歴史博物館には陶瓷実物が陳列され景德鎮の陶磁器産業史が示されており、明清朝の手入れの行き届いた風格ある建築群がある。景德鎮陶瓷館は、3千点を超える陶磁珍品を収蔵し、芸術宮殿の荘厳さを漂わしている。かつての官窯である龍珠閣は、郊外の珠山の頂上にあり、典型的な古代中国の建築文化がみられる⁽³⁰⁾。

筆者ら2002年5月の視察団は、2日弱の間に数ヶ所の大学、企業、旧跡を見学した。これらは、景德鎮のやきものに関するごく一部にしか過ぎない。しかも、専門知識や準備、見学時間の何れも不足して、あまり理解できないまま足早に通り過ぎた感が強い。幸いにもその後、1997年5月に訪れた愛知県陶磁器工業組合主催の景德鎮視察団の報告書が入手でき、1978年に訪れた陳舜臣の『中国やきもの紀行 景德鎮』にも巡り合う。それらを比較参照して、今回の観察・理解不足を補いつつ、筆を進めた。また今回、ほとんど見学できなかったが1997、78年に何らかの見学記録があるスポットについては、節を改めてとりあげ、景德鎮のやきものに関わる諸機関、すなわち大学や研究所、企業、旧

跡などをできるだけ広く紹介する。

4.2.1. 2002 年視察の大学・企業・名所旧跡

景德鎮陶瓷學院

景德鎮陶瓷學院（秦錫麟學院長）は、中国で唯一の陶磁器専門大学である。山東省、河北省など代表的陶産地の指導者の 70% は、同学院の出身者とのことである。1909 年に陶瓷学堂として設立され、1958 年に国立大学になる。1966 年に始まった文化大革命で、陶瓷学院は閉鎖され、再び開校にこぎつけたのは 1974 年のことである⁽³¹⁾。

最近、陶瓷学院は全面的に改編され、日常用から芸術、建築、衛生、電子、工業用、特殊陶磁器などに至るまで、陶磁器に関するほとんど全てにまたがる最先端の陶瓷専門大学として生まれ変わった。7 つの学院（設計・芸術、材料科学・工程、機械電子、工商管理、成人教育、科学技術、情報工程）と 4 つの学部（熱工程、外国語、社会科学、体育）からなる。学院と学部の違いについては、学院の方が学部より規模が大きい。

アメリカ、韓国など 18 の大学と姉妹提携を結び、米欧、カナダ、日本、アフリカなどから留学生をたくさん受け入れるなど国際交流を活発に行っている。学生は全国から募集していて、1 ～ 4 年生 6 千人、研究生 2 千人の計 8 千人から成るが、「2005 年には 12 千人規模にしたい」と秦錫麟学院長はいう⁽³²⁾。

景德鎮陶瓷股份有限公司

4 工場があり、従業員は 1,100 人（内、デザイナーは 20 人）を抱え、景德鎮を代表するメーカーの一つである。海外からの注文品も生産しており、2001 年 10 月に開催された APEC 会議の時の昼食用および夕食用の食器はここで生産された。江沢民主席が来た時に使用した食器や、中南海（国宴の開催される場所）会議で使用された食器も展示されている。

景德鎮雕塑瓷廠

雕塑瓷廠は、人形や動植物など置物を専門につくる工場である。間口は広いが、奥行きは深く、広い工場で、1978 年には約 1,200 人が働いていた。さまざまな置物がつくられているが、文化大革命の時代には、製作種類が限定さ

図7 景德鎮彫塑瓷廠の展示製品



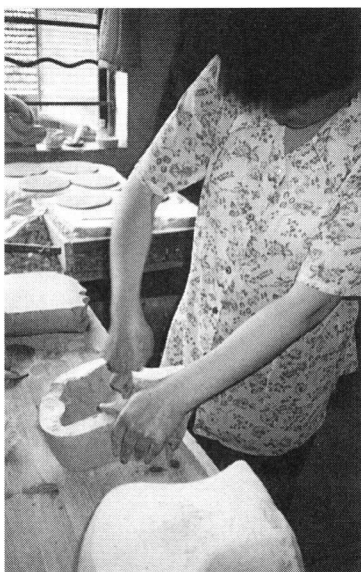
出所：米本敬治氏の撮影（2002年5月）

れていたという。輸出用につくられるものが多く、需要者の大部分は海外に住む華僑とのことである。一番人気があるのは、子どもに囲まれてあぐらをかいている布袋さん^{ほてい}という。彫塑師はむかしから福建省の出身が多かったそうである⁽³³⁾。

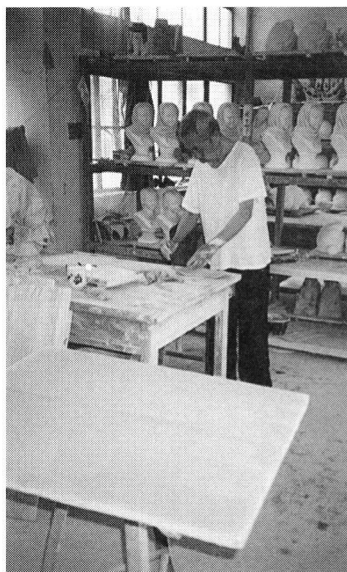
最初に15分間、ビデオでの説明を受けた後、そこで紹介されている作品を2階の展示室（図7）で見学した。2001年5月末には江沢民主席も同瓷廠を見学したという。前工場長であり中国工芸美術大師（人間国宝）の劉延長に面会できた。展示室には手作業を主体とした手の込んだ製品が多く、伝説や民話、神話を基に素材が選ばれている。透かし彫りなどが精巧で、天女と花、寿老人、動物などの芸術的なもの、現代的なものとしては革命期の出来事を主体に老農兵の闘う姿像などがみられる。工場内は、きめ細かい手仕事には若い従業員がたくさん従事しているが、手のかかるものは年配者が時間をかけてつくっている。成形は、石膏型を使った手おこし式で、両方の型に土を押し込み左右の型を合わせて形を作る方法である。その後で、部品（一部手捻り）を接着し、細部はへらで彫刻していく。一部の製品にはレースも使用されている（図8）。全体として、非常に手間のかかる作業である⁽³⁴⁾。

図 8 景德鎮彫塑瓷廠の作業工程

①作業場の風景



②型おこし成形工程



③磁器レース成形工程

出所：愛知県陶磁器工業協同組合，前掲書（図4と同じ）

④へら仕上工程



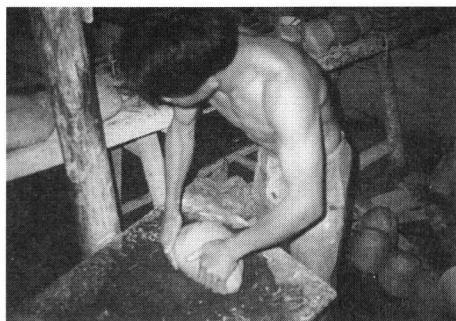
⑤部品付け仕上工程



⑥絵付工程



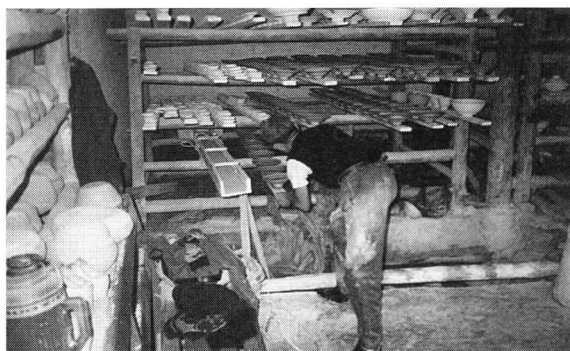
図9 景德鎮古窯瓷廠の手づくり工程



①土練り工程



②手ロクロ工場



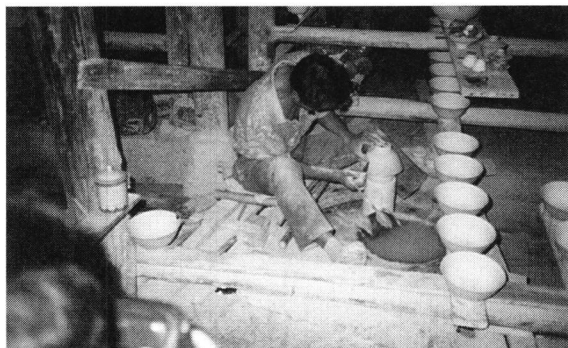
③乾燥場

出所：愛知県陶磁器工業協同組合，前掲書

陶瓷歴史博覧区および古窯瓷廠

景德鎮市の南西の茶畑に囲まれた楓樹山地区にあり、やきものとお茶の販売で昔儲けた金持たちの建物を現存保存している。明、清時代の景德鎮の代表的な家や工場を復元したもので、一部は本物を移転している。清代庭園式邸宅を模した建築物の入口を入ると、正面の奥に陶瓷博物館、右手には古窯瓷廠（窯場）がある。博物館には周辺から発掘された明や清時代の古陶磁や製造工程を

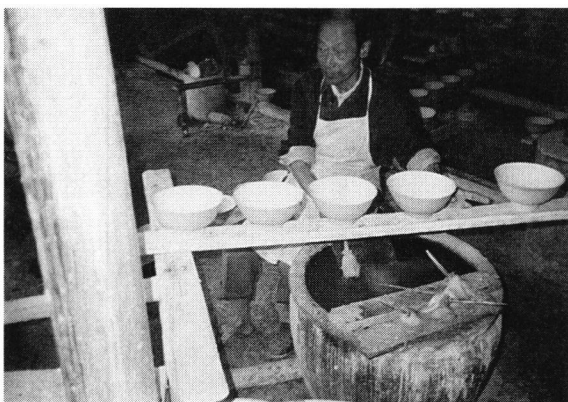
④水拭き工程



⑤削り工程



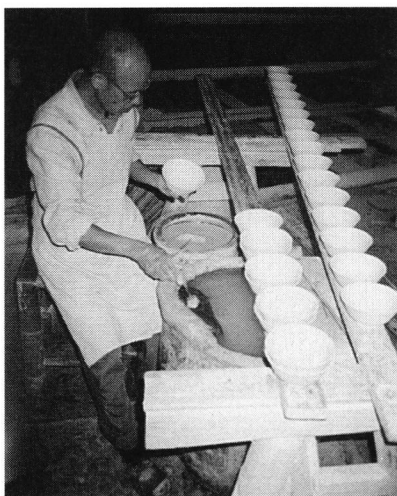
⑥仕上げ工程



⑦裏印貼り工程



⑧施釉工程



⑨焼成前の素地



⑩焼成品



⑪染付工程



説明する陶板などが展示されている。

古窯瓷廠は、清時代の皇室に納めるための陶磁器を焼く御用工場を再現したものである。古工芸品、作業場、古窯室などが完璧な姿で保存されている。伝統を守り、技術の保存とその手法を観光客にも見学させている。ここでは、水すい轆ひ、ロクロ、削り、絵付など一貫で作業している（図9）。初期段階では大変重要な土練りは、若い青年の手でみごとに行われる。桶で作った1m程の大きなロクロを使って、長い棒で左回し（日本では右回し）に回転させながら成形する。成形された素地は、独特のカンナで削られ、陰干しして絵付を待つ。胎土

図 10 柴窯の建物と焼成用の薪
—景德鎮古窯瓷廠—

柴窯の建物



焼成用の薪



出所：愛知県陶磁器工業協同組合，前掲書

が非常に薄く、透かして見ると内側から絵柄が見える「薄胎磁」という白磁を削る。10代から釉薬掛けを続けている職人の、釉を掛ける動きには無駄がない。若い女性が絵付をしているが、下書きもなく直接素地にすばやく絵付をしていく。団員（技能士）も舌を巻くほどの見事さである⁽³⁵⁾。薪による窯場、柴窯は景德鎮に現在2つしか残っていないが、その1つがここにある(図10)。これらは、中国建築史上においても稀に見る古工業建築であるとのことである。広い

敷地内には売店も3～4ヶ所あり、出来上がった製品を見学者に売り込んでいる。古陶磁の写しである「仿古品」も売られている。

龍珠閣

中華北路の西側の小高い台地に立つ3重の塔で、明・清時代の官窯跡に1990年に再建されたものである。塔内は5階建てになっていて、1～2階は周辺から出土した磁器が展示され、3階は発掘情景がパネル展示されている。磁器類は、割って埋められていたものを掘り出し丹念に再構成してつなぎ合わせ復元したものである。小さな破片をつなぎ合わせていく作業は膨大である。龍の形が多いが、皇室の使っていた紋が龍であったからとみられる。龍は、中国のやきものの代表的なものの一つである。贈答・購入者の階層によって3種類に分けられる。その違いは足の指と爪の本数で、皇室用は5本、官僚用は4本、民間用は3本という。

元の龍は、後の明のそれに比べて、イキがいいといわれてきた。描かれた龍は、たいてい4爪か3爪である。元では、龍鳳の模様は皇帝にのみ許された。しかし、その「龍」とは5爪2角のものと解され、4爪や3爪の龍は禁制に該当しないとされた⁽³⁶⁾。

景德鎮陶瓷館

景德鎮陶瓷館は、市街を見下ろす小高い場所にある2階建て(一部3階建て)の建物で、1954年に建設された。ホテル(景德鎮合資賓館)から池のそばを降りて間もなくの所にあり、瀬戸市と景德鎮市との友好提携調印(1996年10月)が行われた場所でもある。中型の陶磁器博物館で、古代から近代まで景德鎮でつくられた陶磁器が展示されている。時代ごとに系統立てて陳列されていて非常にわかりやすい。

陶瓷館は2部に分かれている。1部はいわば陶瓷歴史博物館、2部は現在の景德鎮のすぐれた作品を示している。第1～3室(1部)には、景德鎮の歴史が生み出した品々が陳列されている。第1室には新石器時代から元代までの、縄文土器や古越州青瓷、唐代の三彩、宋代の黒釉・青花・影青、元代の青花・釉裏紅、第2室には明代の青花・釉裏紅・五彩が、第3室には清代の種々の品が並んでいる。

陳舜臣が『中国やきもの紀行 景德鎮の旅』で語るのは、景德鎮の磁器の1千年にわたる壮大な歴史であり、この陶瓷館を主要な舞台にしたものである。年代順に配列された第1～3室展示品に沿っての詳細な叙述の中から、各時代の特徴をとりあげてみたい。

北宋の景德鎮は、すばらしい青白磁を生み出したが、陶瓷館にもすばらしい影青いんちんが展示されている⁽³⁷⁾。宋磁の世界のあとに、染付という意表外の新機軸が現れた。元の染付は雄渾な筆致で、ぎっしりと模様がつけられている。それに比べて、明の宣徳になると、模様は整理されて空間がずっと増え、筆致は流麗であり、宋から元にかけての変化がよくわかる。空間が増えたのは、一つにはその胎土が元代よりも白く美しくなったことにもよるとみられる⁽³⁸⁾。五彩すなわち赤絵の登場により、展示品は明あたりから華やかになる。赤絵の本格的な登場は、成化年間(1465-87年)からで、美しいブルーの染付の時代から、多彩な赤絵時代を迎える⁽³⁹⁾。時代、人心が高揚する時、衰微する時、つくりだされる作品にまともに反映される。乾隆(1736-95年)以降の清朝衰退期には、景德鎮のやきものは悪くなり、むしろ卑しくなった⁽⁴⁰⁾。

第4～7室(2部)には、現代陶瓷部門の製品(薄胎瓷・青花)が展示されている。館内には各種の書物や陶磁器の販売もしており、ここで購入した2冊は小論をまとめる上で貴重な手がかりとなった。

4.2.2. 1997年の視察記録にみる研究所・企業・名所旧跡

1997年5月の景德鎮視察訪問は、96年10月に調印された瀬戸市と景德鎮市の友好提携記念事業として行われたものである。愛知県陶磁器工業協同組合が中心となり、陶業界同士の交流、やきものの技術と情報を得るために企画されたもので、訪問団のメンバーも、陶磁器製造業実務者を中心にアドバイザー(技術・デザイン)を加えて構成されている。約20ヶ所にわたる研究所、企業、名所旧跡を精力的に訪問しての記録⁽⁴¹⁾は、近年における景德鎮の陶磁器産業・技術をみるうえで貴重な資料である。その資料に基づき、2002年の景德鎮視察訪問では見学・交流できなかったスポットを中心に紹介したい。

中国轻工总会陶瓷研究所

市内中心部にあって、敷地面積 96 千 m²、建物面積 34 千 m²、固定資産 1 千萬元の規模を誇る。1954 年設立以来、指導的な役割を果たし、その優れた技術陣容と先進的な設備条件によって、科学技術面で景德镇の発展をリードしてきた。職員数は 284 人で、内 60% 弱が技術専門員である。

中国轻工总会陶瓷研究所は、中国軽工業部直属の唯一の陶瓷研究所であり、科学技術と工芸美術の総合的な研究機構を有し、全国陶瓷産業の科学技術センターになっている。研究所には、23 の科学研究室と 10 数室の画室や彫塑室がある。高級職称を持つのは 35 名、その内 2 人は中国工芸美術大師(人間国宝的な存在)に選ばれており、中級役称 64 名、初級役称 67 名いる。研究所が所有する機器類は 330 台余で、その内、国家統官最新精密機器が 13 台あり、図書館には国内・国外の専門図書を 3 万冊以上所蔵している。設立以来、研究成果は 400 項目以上にのぼり、科学技術と工芸美術の国際交流も、日本、朝鮮をはじめ 11 ヶ国と行っている。

本館 2 階の広い展示室には、中国工芸美術大師や高級美術師の作品が展示されている。中でも、2 人の中国工芸美術大師(王錫良、張松茂)の作品は、優れた技巧と優美な風格で早くから内外に聞こえており、人々によく知られている。王錫良大師の瓷板画「黄山」は、「連なる山々が高くそびえ、雲がたなびく優美な境地を描き、技巧を弄せずして黄山の特色をよく表している」。また、張松茂大師の作品は、「極めてユニークな芸術風格で、一般の粉彩常用の画法から抜け出て墨線勾勒を用いている。その描く梅石は雄渾玲瓏としており、中国画の筆意を具えまた装飾効果もおさめている」と、研究所は絶賛する。

江西省陶瓷研究所

江西省陶瓷研究所は、1954 年に開設された。この研究所の正式名称は、「江西省陶瓷工業科学芸術研究所」で、技術の研究と芸術の研究を兼ねている。文化大革命時代の 1968 年に解散を命じられ、再開したのは 72 年のことである。1978 年の資料では 190 人(技術関係 68 人、美術関係 28 人、残りは作業員および研修生)の人が働いている。解決困難な問題の研究や新技術の開発、技術情報の収集・発信センターの他に、伝統技法の次世代へ継承も、この研究所の大きな

役割である。美術関係者 28 人というのは、すぐれた伝統の持ち主である⁽⁴²⁾。

鮮やかな緑に包まれた 3 階建ての建物が、河西省陶瓷研究所である。その 2 階は、各部屋ごとに仕切られ、1 人 1 部屋になっている。原型、成形、下絵、上絵などに分かれて、各部屋で別々に研究や作業に従事しており、視察団の中の技能士や実務者の質問にも丁寧に応じていた。建物の 1 階は、研究員が制作した作品が展示されている。劉翩天所長によると、研究所で活躍している若い研究員たちの中には、日本に留学して学んだ人が多くいて、所長自身、日本を 3 回訪問し研究施設やメーカーを見学したという。

三宝石瓷砂鉱山および水簸工場

景德鎮市よりバスで約 40～50 分、町を出て清流の河沿いに山道を走る。小さな村を幾つか過ぎると、川沿いに藁葺きの水簸場が一定の間隔を置いて現れる。水車を利用して、ゆっくりとカオリンを粉碎している。一瞬、時間が止まったような感覚に襲われる。麓の村の生活も、村を悠々と流れる水量豊かな川も、今の日本では考えられないほどゆっくりしたスピードで過ぎていく。そうした窓越しの風景に見入っているうちに、鉱山にたどりつく。バスを降りて、鉱山の入口へと、かなりきつい勾配を急ぐ。

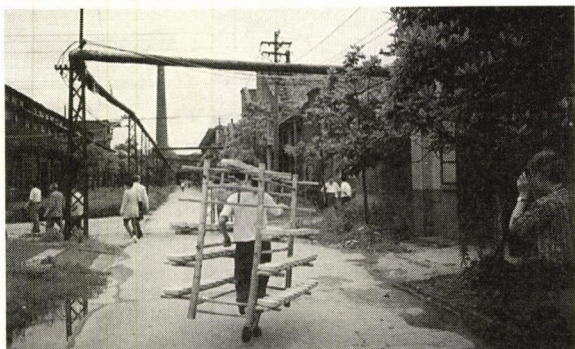
数分で採掘場の入口に着く。入口の鉄格子の扉は、閉められたままである。この鉱山は国営であるが、従業員に給料が払えなくて最近、休業し閉鎖中とのことである。採掘の坑道は地下へ 500 m 掘り進んでおり、採掘した瓷石はトラックに乗せ、専用の大型ウインチで行き上げる。

水簸工場は、帰路の途中にある。上述の、藁葺き小屋の水簸場である。老人が一人ハンマーで瓷石を割っている。それを 40 年間続けているという。大きな瓷石をハンマーで 1 個ずつ小さく割りながら、良質のものだけ選別していくが、手先の動きは素早く正確である。川に沿った土場には石で組んだ臼があり、水車を使った杵でゆっくりと搗き粉碎する。非常に細かい粉末状に磨り潰される。片隅には 2～3 m 四方の水簸の漕があり、段差をつけた 3 漕式になっている。もう一方の片隅には、藁葺き屋根用の藁の束が大量に積んである。藁葺きにするのは、鉄粉防止のためである。

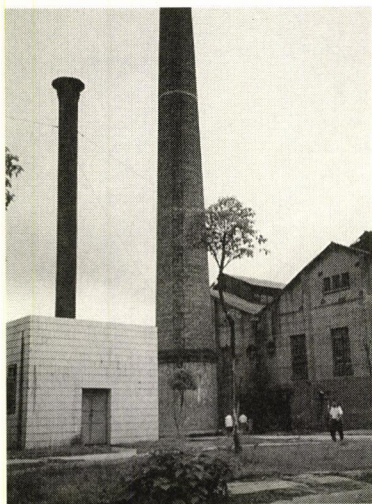
山を下った村の中には、大きな水簸工場がある。瓦葺屋根の工場に入ってい

図 11 景德鎮宇宙瓷廠の工場・作業風景

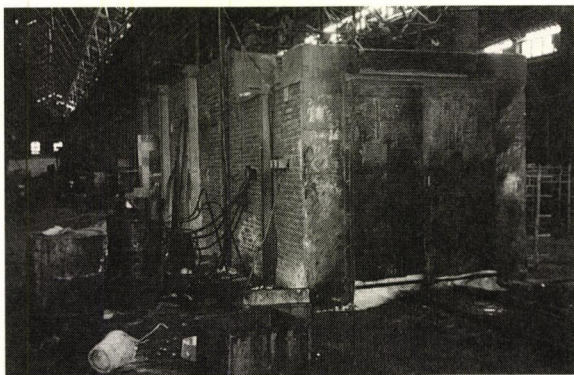
①工場内：天秤で
素地を運ぶ作業員



②巨大な煙突



③ 70 m³ のトンネル窯



出所：愛知県陶磁器工業協
同組合，前掲書

④生素地の皿



⑤型乾燥機

⑥ベルトコンベアーの前で
従事する女子作業員

⑦施釉工程



⑧上絵転写貼り工程



⑨検品荷揃え工程



くと、電動式ダンバーが40基ほどあり、猛スピードで搗いている。上述の老人一人の水簸場とは、様変わりの光景である。工程は同じであるが、働く人は若い男女で、ほとんどが手作業である。

景德鎮宇宙瓷廠

輸出用食器主体の国営大手メーカーで、1958年に設立され、従業員は1,800人、工場敷地は24千 m^2 である。生産品目は輸出用洋食器、日用食器、ティー・コーヒーセット等で、輸出先は主としてアメリカである。生産は月200万個、月商は4.5～5千万円位で、従業員の就労は完全週休2日制である。

敷地内には大きな工場が立ち並び、その一角に直径7～8m、高さ60m位の巨大な煙突が3本建っている。竹の天秤を担いで素地を黙々と運ぶ従業員が工場の間を行き交う。成形工場は、自動ロクロ、ベルトコンベアをはじめ近代設備が揃っており、働く従業員はほとんどが若い女性である。焼成窯は、重油焚きで70 m^3 が3基ある。絵付工場では、プレートに転写貼りをしている。日本ではゼラチン貼りであるが、アルコール貼りで作業は非常に素早いものの、よくみると転写がずれていたり重なったりしている。出荷場では、大勢の女性たちが検品し品揃えをしている。積み上げたプレートを見ると、ひずみは一目でわかるものが多い(図11)。

事務所の2階にあるサンプルルームで、洋食器メーカーの団員いわく。「私の会社で10～20年前に製造していたのと全く同じものが並んでいる!」。生産や問題点については、労働者と技術者、知識層の3グループで共同研究や協議をして進めている。一番大きな課題は、製品の歩留まりであり、欠点はひずみ、変形などであるという。

景德鎮建国瓷廠

数年前までは従業員2千名位の大規模工場で、釉裏紅、辰砂の製品を主に生産していた。1997年現在は、製造を止めており、在庫品の販売のみ行っているようである。建物の2階にある展示場に案内され、展示製品を見学した。形状、色、柄など今一つ団員の興味を引かなかったようである。

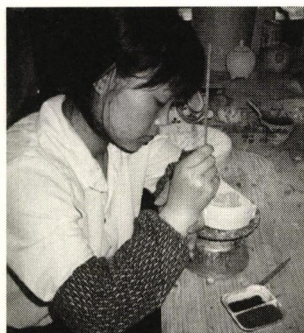
江西省陶瓷工業公司

製造品目は染付製品で、特に古宮博物館のレプリカ(複製品)が主体である。

図 12 明青園の建物と絵付け・部品づくり工程



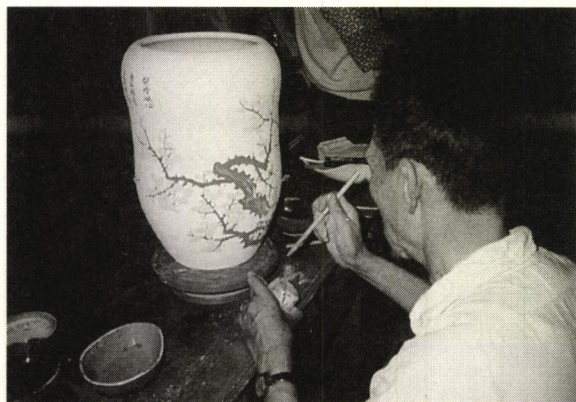
①寺院を思わせる明青園資廠の建物



③絵付工程



②花卉づくり



④一珍盛り工程

出所：愛知県陶磁器工業協
同組合，前掲書

日本からの注文が主であるという。景德鎮陶瓷学院の考古学教授であった孫本禮（社長）が、香港企業との共同出資でつくった合弁会社である。成形は手ロクロ成形、絵付は手描きで、従業員は若い人が大半である。古宮博物館からの注文である染付の大皿（大鉢）が、視察団の目を引く。工場の見学後、2階の展示場に案内される。思い思いの製品を購入する団員も少なくなかった。

明青園瓷廠

一見、寺院を思わせる古い建物で、自由に入場できる。山門のような入口を通り抜けて渡り廊下を過ぎると、数百年も前の建物と思われる陶房に着く。陶房は、作業ごとに個室に分かれており、中は暗い。そこで働く作業員は非常に若い人ばかりで、ほとんどが女性である。成形は手ロクロ、絵付は手描き染付である。20歳前後の若い女性2人が、マッチ棒サイズの菊の花弁を手捻りで造っていく（図12）。よくも切れずにできるもので、その見事な手さばき、熟練の技に、団員たちの目が釘付けになる。

入口の脇には古代から現代までのやきものが展示されており、先程の女性たちが造っていた菊の花弁のついた額皿もみられる。一部販売もされているが、旧いやきものは非売品で中国の歴史を感じさせるものばかりである。

景德鎮湖田陶瓷廠

これまで視察した工場に比べると、小規模である。製品は、手ロクロ成型と流し込み成型によるもので、花瓶や80cm四方の大きな陶板が主体である。豆腐より一回り大きいブロック状の粘土は、成形用のものである。水で薄く溶き、水瓶（匣鉢状）に移し、水切りしたものを寝かしておいて使用する。流し込み成形は、非常にのんびりした作業風景である。老人が、攪拌機から桶で泥漿を一杯ずつ運び鑄込場のカメに注ぎ足していき、鑄込作業員がそれを型に流し込む。成形製品は花瓶のみで、石膏型もかなり使い古したものとみられる。ロクロ成形をやっているのは、20歳台の若い男性である。荷作り場では、80cm角ぐらいの陶板を梱包している。陶板には石膏ボードで造った台の両面を貼り付け、それをカートンに入れて発送する様である。

湖田古窯遺址

約40万m²の広大な窯址は、五代から明中期(10～16世紀)にわたって約700

年焼き続けられてきた窯址である。住宅地の中にあっても、しっかりと保存されているのは、中国の文化財行政の確かさを示すものである。出土した遺物の中でも特筆されるものは、イギリスのプランクストン氏が1937年に発見した磁器である。11世紀前半から景德鎮で焼かれたもので、彫り文様に青みを帯びた釉薬が溜まって淡青色に見えるために、「影青」と呼ばれるものである。今回、目にした古窯の一つは、ひょうたん形の穴窯で、長さ8.4m、焚き口、火袋にはすでにレンガが使用されている。もう一つの古窯は、馬蹄窯である。馬蹄の形をした長さ2.9m、幅2.7～2.8m、高さ2.3mの小型の古窯で、奥まった小高い丘の頂上にある。壁面もレンガを使用しており、明中期には既にレンガ貼りの窯があったことになる。

近くの湖田古窯遺址陳列館には、湖田窯のジオラマや晩唐から元代にわたる遺物・匣などの出土品を展示しており、湖田古窯の歴史を解説している。

4.2.3. 陳舜臣のみた1978年の企業・工場

1978年夏に景德鎮を訪ねた陳舜臣は、やきものに関わる各種の研究所や大学、企業・工場を見学している。それらを、中国やきもの2千年の歴史の中で綴ったのが、『中国やきもの紀行 景德鎮』である。

彼が訪れた中で、瓷石礦廠、為民瓷廠、瓷用化工廠、景德鎮芸術瓷廠について、以下ではとりあげる。その他にも、景德鎮陶瓷館、陶瓷研究所、彫塑瓷廠、湖田などを訪れているが、ここでは省略した。2002年ないし1997年の視察と重なるために、それらの中で参照し紹介しているためである。

瓷石礦廠

瓷石礦廠は、採石から粉碎、袋詰までの作業工程があり、800人の労働者がいる。1958年に創立され工場には、5基の粉碎機が据えられ、瓷石の投入、粉碎、袋詰の過程が一貫して行われている。粉碎工場で働く人たちは、白い帽子をかぶり、マスクをしている。5基のうち一番端の1基は、女性ばかりによって操作されているが、他の4基に比べて能率が低いとか故障が多いといったことは全くないという。工場は広々として、瓷石の山があちこちにみられる⁽⁴³⁾。

為民瓷廠

資本金の全額が国家出資によるもので、従業員2千人の大規模工場である。この種の大量生産工場は、他に5つほどあるという。「機械化がまだ足りない」という言葉が、各工程で聞かれた。工場責任者によると、文化大革命の時代は「供給される原料も少なく、それも良質のものが少なかったので、製品も一級品の率が低かった」。「1985年までに、すべてを機械する」という⁽⁴⁴⁾。

瓷用化工廠

顔料その他の原料を製造し、各工場や工房に供給している。1953年に設立されたが、当時の工人はわずか6人だったという。1956年ごろから始まる吸収合併によって、合理化が促進され、工場の設備も飛躍的に改善されて、1958年には400人の工人を擁する工場になっていた。1978年現在、瓷用化工廠には600人の工人が働いている。陶磁器製造に用いる化学系の原料は、ほとんどここで生産される⁽⁴⁵⁾。

景德鎮芸術瓷廠

為民瓷廠は大量生産の工場で、陶瓷研究所がその正反対の極にある工房だとすれば、両者の中間的存在といえるのが、この景德鎮芸術瓷廠である。1958年に創設され、1978年現在、850余名の工人を抱えているが、ちょうどその半分が女性だという。

この工場の主な仕事は、絵付である。手作りに近い品を生産し、輸出がかなりのウェイトを占めている。年産約30万件の芸術的な磁器をつくっているが、文化大革命の時代は、絵付の種類も厳しく制限されていた。「今年あたりで、やっと4人組以前のレベルを取り戻しました。数量だけでなく、絵付の種類もそうです」という。この芸術瓷廠で制作されている磁器の大半は、「粉彩」と呼ばれているもののようで、景德鎮がめざしているのは、19世紀に一度衰微した清の黄金時代の再興のようにみられる⁽⁴⁶⁾。

5. 景德鎮から上海へ

5.1. 上海からみた景德鎮

最先端の息吹と活気の上海—景德鎮との落差—

上海は、広さ 6,200 km² で日本の群馬県 (=東京都+埼玉県) に相当し、1,600 万人の人口 (戸籍人口 1,300 万人+流動人口 300 万人) を抱える。人口の 8 割は、1/3 のスペースを占める街中に住んでいる。土地は肥沃で気候は暖かく、野菜や果物が豊富で桑畑のあるシルクの産地でもある。副産業の漁業では蟹やエビなどがよくとれる。農家は豊かであるが、若い人は街に出てしまうという。

上海の郊外には一戸建てが多く、街中はアパートで素敵なマンションも多い。1 m² あたり 6～8 元 (10～13 万円)、広さは 3 人家族ベースの 110 m² (その 8 割が使える面積)、近くに地下鉄のあるマンションが一番の売れ筋とのことである。上海の不動産は好景気に沸いており、2001 年 9 月から 2002 年 5 月の間に 6.9% 値上げした。台湾や香港の芸能界の人々が買う。上海まで 3 時間の温州の金持ちなどは、ツアーで来て現金でマンションを買うという⁽⁴⁷⁾。

上海は、中国における人、物、金の流れの要としての役割を持ち、中国最大の経済都市であり、人口 4 億の沿海部における近年の急速な発展の中心に位置する。景德鎮にとって、上海は最も近い距離にある沿海部の大都市に他ならない。それでも、上海から景德鎮までの 550～560 km は、これまで決して近いとはいえなかった。汽車とバスを乗り継いで 8～9 時間、汽車で 16 時間半かかっていた。

上海関係者によると「景德鎮は 30 年前の上海」という。たしかに、「磁都」と呼ばれ 2 千年のやきものの歴史文化をもつ中小都市の景德鎮に対し、上海は現代的な息吹に満ち溢れた中国最先端の大都市であり、対照的な様相を呈している。景德鎮の市街地で目にしたようなりやカーや三輪車、薄暗い貧素なアパートや民家群などは、上海ではほとんど見かけない。また、景德鎮で行われている夏 3 時間、その他 2 時間の昼休み、そして昼寝の習慣などは、グローバル競争の激しい上海では姿を消している。

景德鎮の朝

景德鎮では、景德鎮合資賓館というホテルに泊まった。室内はゆったりと広く、冷暖房も完備している。市内では、最高級のホテルという。ホテルの前は公園広場になっていて、広場と池を中心にして周囲にウォーキング・コースがあり、それを取り囲むように森林が広がる。夜明けとともに、公園には数百の市民が集まり、騒がしくなる。朝5時過ぎに、太極拳などの掛け声が目覚めた。広場では各種の太極拳にいきしむグループが幾つも見られ、ウォーキング・コースを歩いている人も多い。ほとんどが中高年の人たちで、8割近くが女性とみられる。ウォーキング・コースのバイパスになる小山の山道には、整備された階段が敷かれ、登り下りする人や小山のあちこちで奇声を発する人たちなど各人各様である。添乗員の話によると、60歳以上の年金者は何もやることなく、昼間はぼんやり過ごす人も少なくないという。いずれにしても、公園に朝から元気に集い運動や談笑に興じる多くの人たちをみると、日本の都市で失われた「のどかな」光景のように筆者の目に映る。早朝からの太極拳の掛け声や運動は、上海のホテルでも見られたが、景德鎮でみたようなのどかさは感じられなかった。

景德鎮合資賓館には、陳舜臣も1978年夏に宿泊している。ただし、建替え前のホテルである。「私たち夫婦は、参会の予備室のついた、ひろい部屋に通されました。バス・トイレつきです。給湯は時間が決まっているようですが、不自由するようなことはありませんでした。景德鎮の賓館で思い出すのは、そのすさまじい暑さでした。りっぱな建物ですが、やはり年代ものですから、冷房の設備はありません。もっぱら扇風機の力を借りるのですが、そのていどでは、とても眠れたものではなかったのです。』⁽⁴⁸⁾

景德鎮への旅

しかし近年、両都市の差が縮まり始めている。その原動力の一つになっているのが、空港や道路網などの交通インフラの整備である。1995年に景德鎮羅家空港が（市の東南9 kmに）できて、上海と景德鎮の距離は飛行機で1時間15分に短縮された。上海向けの飛行便は週2回が週4回に増え、北京向けにも週2回発着するなど、大変便利になり、景德鎮への来訪者も増えて景德鎮の活性

化が進んだ⁽⁴⁹⁾。

景德鎮に空港ができる（1995 年）までは、景德鎮への陸路の旅はたいいてい南昌市から始まった。陳舜臣は 1978 年の夏に、南昌市から景德鎮へ自動車で旅したが、その紀行がなかなか興味深い。南昌を出発するとき、案内嬢から「何ヶ月も雨が降っていませんから、乾ききっています。埃をかぶることは覚悟してください」と言われる。「彼女の予告どおり、道中の半ば以上は、砂けむりに悩まされる自動車の旅となりました。南昌市と景德鎮市の近くは、アスファルト舗装ですが、そのあいだに、未舗装の道路がかなり長く続くのです。午前、南昌市を出発し、お昼、万年県の招待所で食事をとり、たっぷり 2 時間以上昼寝をしてから車に乗っても、まだ日の高いうちに景德鎮に着きます。」⁽⁵⁰⁾

それから 24 年後、われわれ視察団一行は、景德鎮から上海へ戻る際に都合の良い直行の飛行便がないので、景德鎮から南昌へバスで走り、南昌から上海への飛行便に乗った。24 年前とは逆順の旅である。景德鎮から南昌への向かう道路は、片道 3 車線ずつの広い直線の舗装道路で、トンネルも往復が別口になっている。中国一の絶景といわれる黄山、琵琶湖の 20 数倍という鄱陽湖の横を通り抜けての 3 時間半の快適なバス旅である。未舗装の続く埃まみれの旅とは、雲泥の差といえる。

しかし、その途中で、トイレ休憩のため 2 回モーターに停車したが、トイレの悪臭は聞きしにまさるすさまじさである。水は出ないし、横長の穴が掘ってあるだけでトイレのドアも低く外から丸見えである。広い舗装道路の素晴らしさとは、あまりにも対照的といえる。内陸部地方と景德鎮市内の生活格差はきわめて大きく、景德鎮と上海の差異すら小さく感じさせてしまう。

景德鎮でのガイド通訳の女性によると、景德鎮市では「やっと都市の希望が持てるようになった」という。彼女は 10 余年前から同市に住むようになったが、「当時は村みたいで、道路も狭く、店も旧く、買い物は上海へ出かけていた」。「最近は服装品やアクセサリなども上等のものが多くなったうえ、上海より値段も安く、ここの暮らしで十分」という。格差は大きいものの、市民の生活レベルは全体的にアップしており、別荘を持ったり海外旅行を楽しむ人たちが増えてきたという⁽⁵¹⁾。

5.2. 上海市民の生活事情—上海ガイド通訳のレンズを通して—

5.2.1. 上海の「小皇帝」

上海で、「一人っ子」政策が開始されたのは、1979年のことである。「一人っ子証」が交付された家庭には、種々の手当や学費免除、優先的入学などの便宜が与えられた。しかし、上海では他の都市よりも早く60年代半ばから計画出産や人口抑制策がとられ、全国に先駆けて高齢化が進んだ。人口の高齢化は、日本では過疎農村から始まっているが、中国では大都市から始まった⁽⁵²⁾。「一人っ子」政策の第一世代が20歳前後を迎えている。

上海では95%以上の家庭が一人っ子とみられ、また夫だけの給料では家族の生活を支えきれないので共働き夫婦が多い。「一人っ子」政策の下で、祖父母4人に父母2人、子1人という逆ピラミッドの家族構成になっている。子どもは今や家庭の宝物、最も大切な存在で、「小皇帝」と呼ばれる。欲しがるものは何でも買い与える風潮の中、わがままのし放題で社会問題になっている。幼稚園や小学校には親が連れて行き、16時の学校終了に先立ち15時半頃になると祖父母が門前で待っている。中学生になっても、そういう光景は珍しくない。学校の勉強はできて、生活能力は身につかず、一人では何もできない。20歳過ぎのある大学生の息子の極端な例である。ゆで卵を学校へ持っていったが、どうして食べるかわからず、持って帰ってきた。母親がいつも剥いてくれるが、ある朝、忙しくて剥かずに手渡したからという。人との付き合いも下手である。愛はもらうだけで、他人に与えること、他人を愛することができない⁽⁵³⁾。

幼稚園から競争が激しく、子どもにもストレスが溜まる。3歳からのベビー音楽教室や英語教室など各種教室が盛んである。ガイド通訳の同窓生に、来年、小学校に行く娘がいる。幼稚園には月1,000円かかるが、その他に毎週、バレエ、ピアノ、英語を習っていて、その費用は月に2,500円（4万円）になる。学費はピンからキリまであり、公立学校はあまりかからないが私学はとても高い。重点学校（公立、市立何れもあり）は、先生の質が高く設備も整っていて重点大学にもスムーズに進めるが、入学するのが実に難しい。まず、知り合いの紹介が必要で、これを「裏門」という。また、「援助費」と称する入学寄付金は、小学校・幼稚園の何れも4万円（64万円）という⁽⁵⁴⁾。

天津市の調査によると、0-14歳の子どもにかかる1ヶ月の支出は800元(1.28万円)で、家庭収入の3割を占める。また、上海など9大都市の6-15歳までの子どもの小遣いは、毎月60元(960円)で、春節(旧正月)のお年玉は730元(1.17万円)に達する⁽⁵⁵⁾。工場の昼食弁当は1食2~3元と安く、生活必需品の価格は低いので高望みしなければ生活しやすいという⁽⁵⁶⁾。むしろ、子どもにかかる費用の高さを際立たせているといえよう。

5.2.2. 上海のサラリーマン事情

文革以前と文革以後の階層差

中国のサラリーマン事情は、年齢によっても産業や企業によっても随分異なる。とくに、文革以前と以後、すなわち文革を経験したサラリーマン層と文革以降のサラリーマン層とでは、大きな階層差がみられる。文革を経験したサラリーマン層、すなわち45歳以上は安月給ながらも勤勉で節約指向である。彼らは恵まれない時代の申し子であるが、それでも良い子どもがいればまだ幸せである。親に給料の一部を渡している若者もいる。

一方、文革以後の層、とくに20-30代の若い層は、年配層よりも給料が高くお金持ちでよく使う。高級レストランやバーに入ると、ほとんどが20-30代の若い層である。外資系や合弁企業では高収入ながらも競争が激しく、頑張らないと首になるのでストレスも高い。彼らはほとんど貯金していないので、結婚費用は親が出すのが当たり前になっている。親は安月給で貯めた金を、子どものためにほとんど使ってしまう⁽⁵⁷⁾。

望ましい結婚相手の男女差

上海の若い女性が結婚相手としての男性に望む5つの条件があるという。「1. 鶏のように早く起き、2. 羊のように優しく、3. 牛のように良く働き、4. 犬のように忠実で、5. 妻が作った料理は豚のように何でもよく食べてくれる」男性である。

一方、若い男性が結婚相手として好む女性の職業は、第一に幼稚園・小学校の先生である。給料は高くはないが安くもなく、休みが多くて残業も少ない。子の教育は任せられるし、職場には女性が多くて浮気の心配をしなくていいな

どが、人気の理由である。看護婦も、その次に高人気の職業である。女性の多い職場であるし、病気になった時に頼りになり医者へのコネもあるからである⁽⁵⁸⁾。

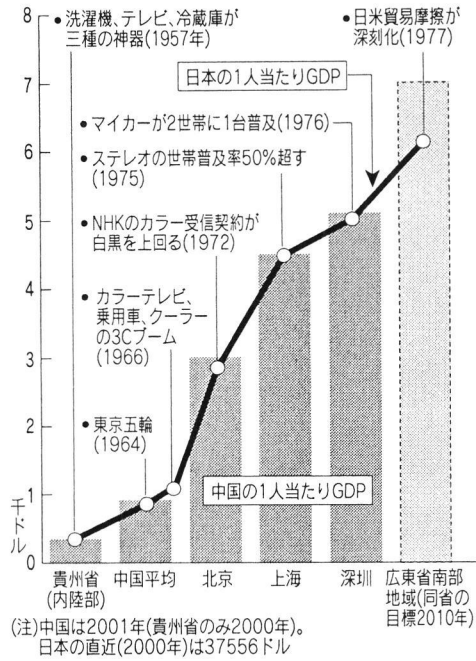
これに対し、筆者の質問にもてきぱきと応えてくれる彼女の職業である旅行ガイドは、結婚相手としては男性の人气がない。朝は早く夜は遅いし、添乗員として外泊することも少なくない。彼女の夢は、ハンサムな金持ちと結婚して専業主婦になり、旅行やショッピングを楽しむことだという。仕事に縛られて、ゆっくりと旅行やショッピングができない現実が投影されている。しかし、実際の結婚条件となると、人柄第一で、良い職業・給料がその次に来る。彼女の勤め先は、250名の従業員を抱える中国第三位の旅行社である。社長は50歳前後の独身女性で、社内には独身女性が多い。女性側の男性をみる目が高いという点もあるが、出来過ぎる女性、強い女性を好まず自分より少し低い相手を望むという中国人男性の求める伴侶像による所が少なくないという。

家庭生活

上海に限らず中国では、専業主婦は少なく共稼ぎが多い。1人で3人の生活費を稼ぐことが難しいからである。小さい子は親に預けたり、保育園に入れたり、農家出身のお手伝い・保母を雇ったりする。お手伝いは、とても安く食事・ベッド付きであれば月1万円で賄える。しかし、教養がなく地方訛りもあるためあまり好まれず、費用のより高い保育園や幼稚園に入れる傾向が強い。お手伝いは、田舎の生活とは隔絶した上海の生活様式に戸惑うことも少なくない。ある悲劇的な例がある。「洗濯した後、赤ちゃんを洗つといてね」と言われたお手伝いは、衣類を洗濯した後、洗濯機に赤ちゃんを入れてスイッチをかけたため、赤ちゃんを即死させてしまったという。農村には水道がなく洗濯機が使われていない地域も少なくない。

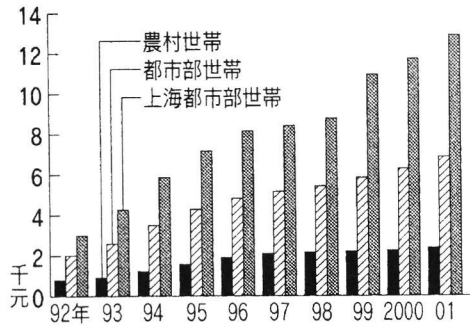
テレビ、冷蔵庫、掃除機、電子レンジ、ステレオ等ほとんどの電化製品は、上海の各家庭には揃っている。電気製品は日本より高いので、日本で買って帰る光景をよく見かけたという。ガイド通訳の家には水洗トイレ2つ、シャワー・フロアも付いている。しかし、小さい頃は家に風呂がなく、公共浴場は待ちが多く1時間待ってやっと入れる状況であった。タオルや石鹸を持って大

図 13 1人当たり GDP にみる中国の各地域と日本の各時代の比較



出所：日本経済新聞，2002年5月28日付

図 14 中国の可処分所得（1人当たり，農村世帯は純収入）



出所：日本経済新聞，2002年6月20日付

衆浴場に行ったり、週に一度は親の工場の風呂場に行って体を洗っていたという。

5.3. 上海に見る消費大国の予兆とその先導役

格差の中の豊かさ

2001年の一人当たり国内総生産（GDP）をみると、中国は905ドルで、日本で東京五輪が開かれた1964年水準（847億ドル）を上回る（図13）。都市住民のエンゲル係数は2000年に初めて40%を割り込み、60年の日本38.8%にほぼ並んだ。いわば、全体としては60年代の日本の水準といえる。その中で、沿海部（4億人）と内陸部（9億人）に大きな格差があり、一人当りの年間可処分所得額では3倍の開きがある。上海の場合、可処分所得は約1万3千元（約20万8千円）あり、都市部平均の2倍に達するなど、都市間格差も広がっている（図14）。

表1 中国3大都市の1人当たりGDPと「実感GDP」

都市名 カッコ内は2001 年の1人当たり GDP	コ メ ン ト	日本貿易振興会 上海代表処 丸屋豊二郎所長	北京華歌爾服裝 (ワコール) 安原弘展 総経理	三菱商事 武田勝年 中国総代表
		都市部の中でも所得格差が大きい。購買力平価では上海は日本と大差なくなってきた	消費者は世界の流行情報を持っている。売れ筋の価格も日本と変わらない	購買力平価でみると、生活費が安く中国人は豊かな消費者
北京 (3000ドル)		3000～5000ドル	5000ドル	1万ドル
上海 (4500ドル)		6000～1万3000ドル	7000～8000ドル	1万5000ドル
広州 (4586ドル)		6000～8000ドル	——	1万5000ドル
[参考] トルコ (3090ドル), 南アフリカ (3020ドル), ポーランド (4200ドル), メキシコ (5080ドル), 韓国 (8910ドル), ニュージーランド (1万3080ドル), 台湾 (1万3985ドル), スペイン (1万4960ドル), 日本 (3万4210ドル) (注) 中国は2001年, 他は2000年の国民総所得の数字				

出所：日本経済新聞，2002年6月20日付

上海や広州の一人当たり GDP は 4.5 千ドルと最貧内陸部の 10 倍を超すだけでなく、南アフリカやポーランドを上回り、メキシコ並みの中進国水準となる。一人当たり GDP が 4 千ドルを超えるとモータリゼーションが始まるとされ、今まさにこの現象が起きている。

他方、上海には 1 ヶ月 2 千元程度の収入で生活できるという面がある。生活物資が安い上に、朝市でも夕方になれば 1/3 ぐらいの格安価格になり、買い物上手の腕の見せ所となる。また、交通費も地下鉄が 2 ～ 6 元 (32～96 円) でタクシー料金も 3 キロまでの基本料金が 10 元 (160 円)、その後は 1 キロごとに 2 元増しで利用しやすい料金体系になっている⁽⁵⁹⁾。

こうした物価水準の低さは、上海をはじめ北京や広州など中国大都市における生活実感値を、統計値以上の水準に引き上げる。日本の中国駐在員に、日本の数字などとの比較をもとに検討してもらった一人当りの「実感 GDP」は、表 1 にみるように最大 1 万 5 千ドルとの回答もあり、スペインに匹敵する規模である⁽⁶⁰⁾。

上海では、企業間の賃金格差が大きい。100%出資の外資系企業が最もよく、次いで合弁企業、民間企業と続き、国営企業が最も悪い。一流大学卒業者の初任給の場合、外資系 IT 企業は 1 万元 (16 万円) 以上だが、国営企業なら 2 ～ 3 千元 (3.2～4.8 万円) が相場になっている。1 万元以上の高給企業に就職できるのは、一流大学卒の 10%に満たないという⁽⁶¹⁾。しかし、中国全体で見ると、進出した外国企業は沿海部中心に約 40 万社、対中投資は累計 4.1 千億ドルに達しており、外資系企業に働く高収入層は大都市でかなりの規模に達するとみられる。高収入を背景に消費に積極的な「白衿族」(中国語で「ホワイトカラー」) など新富裕層を生み出している⁽⁶²⁾。

巨大消費市場の出現

週休 2 日制については、10 前からまず外資系や合弁会社において隔週休みなど変則形態で導入され、95 年には週休 2 日制が浸透した⁽⁶³⁾。99 年 10 月に政府が始めた年 3 回の連続 1 週間の大型連休が定着するなか、中国は今旅行ブームだという。2002 年 5 月のメーデー連休では、全国で前年同期比 18%増の延べ 8,710 万人が旅行に出かけ、同 15%増の観光収入となり「休日消費」という言

表2 上海における家電製品の普及台数(100世帯当たり)

	1995	1996	1997	1998	1999	2000
カラーテレビ	109	113	119	128.2	144.2	147
冷蔵庫	98	101	102	103	103	102.2
洗濯機	78	82	87	91.6	93.4	93.4
ラジカセ	89	99	82	82.2	83.4	77.2
カメラ	52	52	54	58.6	67.8	70.6
ビデオ	49	51	52	48.8	53.2	52.2
エアコン	33	50	62	68.6	85.2	96.4
電子レンジ	33	45	55	62.8	73.4	78
パソコン	2.2	5.2	8.6	13.2	19.6	25.6
携帯電話	—	—	—	6	16.4	28.8

出所：日本貿易振興会 上海 (単位：台)
日本経済新聞，2002年5月29日付

業も生れた。1999年に給与倍増計画が打ち上げられたが、99年に1回、2001年の2回にわたる引き上げで、すでに計画前の7割増の水準になっている⁽⁶⁴⁾。上海では、高収入で都会生活を楽しむ中国版「ヤッピー」(ヤング・アーバン・プロフェッショナルズ)が出現している。欧米のファッション誌が紹介する高級ブランド品を購入したり、タイヤシンガポールに買い物に出かけたりするケースも珍しくない⁽⁶⁵⁾。

上海マーケットで現在、目玉となっている商品は、化粧品、住宅関連商品そして携帯電話である。上海では現在、住宅建設ブームにあり、次々と高級マンションが建てられては売却されていく。今や都市で働く勤労者のあこがれは、「自動車と住宅」である⁽⁶⁶⁾。また、家電製品普及台数では、表2にみるようにカラーテレビ、冷蔵庫、洗濯機、エアコンがほぼ全戸に行き渡り、携帯電話も急上昇中である。

上海には、こうした旺盛な需要を満たすために日系大手家電メーカーが軒並み進出している。所得水準の上昇は、ファッション産業の隆盛を生むが、こうした若者向けアパレル業界も上海では次第に華やかさを増し始めている。ユ

ニックなのは、中小企業によるブライダルビジネスの拡大である。日系の A 社は、ウェディングドレスの製作と写真館のセットで、この種のビジネスを成功させた。

上海の所得水準の急騰は、住宅、衣料だけでなく庶民の食卓にも変化をもたらし始めている。かつての伝統的な中華料理に代わり、マクドナルド・ハンバーガーやケンタッキーフライドチキンの店が増加し、飲み物も伝統的な白酒に代わってビールが庶民に好まれ始めている。上海の一人当たり年間ビール消費量は、中国平均の約 2 倍である。上海のある日系ビールメーカーのビール販売量（2000 年）は上海で 40% のシェアを超え、外国ブランドではトップの位置を占めている。中国人の好みにあった製品の開発、適切な価格、宣伝力に依っていると関係者は言う⁽⁶⁷⁾。

5.4. 上海の新興ソフトメーカーにみる経営と熱気

―上海万申置程信息技术有限公司の事例―

最近上海での消費ブームは、その周辺地域へと拡大している。長江沿いに西は蘇州、無錫、常州、鎮江、南京へ、南は杭州から寧波へと、江蘇、安徽、浙江の 3 省へ広がりを見せている。この地域が中国コンピュータの新生産基地となり、日米欧や台湾の電機電子企業が進出し、労働者や技術者、管理者が移り住んで、そこに新たな消費を担う住民が増えるにつれて、上海で起きている動きはそこにも広がっていく。

瀬戸商工会議所主催の中国・景德镇市視察団は、最終日の、それも帰国直前（2002 年 5 月 17 日 9:30～11:00）に、上海の新興ソフト会社を訪問した。応対者は王成輝・副經理および長尾諭で、王成輝・副經理から会社の創業と経営についての説明を受け、金志徳・總經理にも面談した。説明および質疑応答はすべて日本語で行われ、興味深い聴き取り調査が出来たので紹介したい。

5.4.1. 上海万申置程信息技术有限公司の沿革と概要

元は証券用ソフト会社（上海万申置程信息産業株式会社）の IT 事業部であった。金融システムの構築が主であったが、日本企業からの案件が多く 1997 年 10

月に日本ソフト事業部を立ち上げ、また 2001 年 6 月には海外ソフト事業部を立ち上げて、2001 年 12 月に上海万申置程信息技术有限公司として独立した。

資本金は 150 万元で、主な出資は親会社の上海万申置程信息産業株式会社 (45%) および上海市科学委員会の会社である上海計算機軟件開発中心 (15%) で、残りの 40% は個人投資家の出資によるものである。関連会社は上記の 2 会社の他に、(株)日中ソフトおよび Double Q Technologies, Inc. (米国) がある。

受注の 6-7 割は日本向けで、国内向けが 2-3 割、欧米向も 1 割を占める。ユーザーの業種は、証券だけでなく通信、製造、車検、ガスなどもある。主な日本ユーザーは NEC、富士通、関西日本電気ソフトウェア(株)、インテグレート・トータルシステム(株)、ニコン、日本 NCR (株) で、中小企業との取引も増えている。主なシステム開発実績としては、海外向けに銀行稟議システム、販売総合管理システム、チェーン店総合情報システム、熱交生産管理システム等の外にも、空港、卸売市場、ガス、原価、出荷など多岐にわたっている。中国の国内向けには、投資信託、税関、空港、学校、財務管理、販売管理、社内 OA、不動産、科学技術情報、不動産経営など多分野にわたる。

システム開発の技術については、開発構造は Browser/Server 多層次構造で、プログラム言語は JABA, ODBC から COBOL や Delphi などに至るまですべてに対応できる。コンピュータ・ソフトの開発は、受注—基本設計—詳細設計—コーディング—個別テスト—総合テスト—納入のプロセスで行われる。日本からの注文内容は、これまで基本設計を日本でやり、コーディング (開発) のみここで行っていたが、昨年末より日本企業と一緒に設計も手がけるようになった。技術と日本語が両方できる企業は、中国ではなかなか見つからない。

5.4.2. 労働力構成、賃金および評価システム

従業員は 46 人で、日本人は 1 人 (長尾)、日本語が話せるのは 5 人であり、20 人位は日本向けの仕事をしている。仕様書の多くは日本語で書かれているが、読むことは出来るという。社内で日本語スクールを開講しており、昼間は文法・文型、夜は会話のレッスンを行っている。年内には 46 人を 70 人に増員する予定である。46 人の内、博士 2 人、修士 4 人、学士 20 数人で残りは専門学

校卒である。今後は、Double Q Technologies, Inc. との提携を核にして、欧米向けの受注拡大もめざしている。IBM にはテストランで3回行った。中国人社員は小学校3年生から英語を勉強しており、英語に関しては問題ないという。

年間売上高は1,000 万元で、人件費がコストの半分以上を占める。人件費は賃金と福利厚生費を足したもので、(失業保険などの)福利厚生費は賃金の半分をしめる。ソフト会社としては平均水準の賃金である。賃金は、基本給+学歴+「年功」+職場地位+仕事内容から成っている。「年功」は、当社および別会社での勤務年数の2種類ある。残業代は厳しく規制しているが仕事量で計算し、そうした仕事内容はボーナスとして毎月支給される。ただし、ボーナスの半分は毎月出るが、残り半分はプロジェクトが終わって査定(品質評価)後に支給される。査定は、必要なデータが揃う3ヶ月から半年単位でなされ、繁忙時は3ヶ月単位で、暇なときは半年単位で行われる。中国の外資系や合弁会社には各種の転職制約などがみられるが、当社には一切ないという。

仕事の進め方はチーム(グループ)制を敷いている。プロジェクトごとにチームが分かれている。3～4のプロジェクトを統括しているのがマネージャーで、その下にプロジェクト・リーダーがいる。各プロジェクトには、プロジェクト・リーダーの下にコーディング担当として3～4人いる。そのうち2人は技術ないし日本語の会話ができ、残る2人は新人である。チームで仕事をしているため、人材派遣は導入していない。日中の賃金コストはかなり縮まってきているが、日本社員の出張旅費などを含めるとかなり違ってくる。これまで、富士通やNECからの受注コストは70～100 万円/人・月であったが、最近では40～70 万円/人・月に下がっている。昨年以來、日本の中小企業からの注文が増えており、日本の大手企業がソフトの海外発注を中小企業に指示している事例もみられる。上海万申置程信息技术有限公司は日本人専門技術者3～4人をインターネットで募集している。

総理は38歳で東京に2年間、副総理は41歳で東京に7年間いた経験があり、何れも日本語が話せる。両者の説明や応対には、自信が漲っている。唯一の日本人従業員である長尾さんは、4月に入社したばかりで27歳と若く、米国に6年間留学した経験を持ち中国語も3年間学んでおり、彼の父は車の部品会社を

経営している。3ヶ国語が話せて日本事情にも通じており、大いに期待されている。

広いフロアに入ると、打ち合わせコーナー、システム開発の各プロジェクト、テストラン、人事部、財務部、社長室兼経理室などの各ブースが低い壁で間仕切られている。全体がほぼ一望でき、日本企業の大部屋方式がとられている。フロアにいるほとんどが若い人たちで、静かな雰囲気の中にも、伸び盛りの新興企業に特有な活気が感じられた。

6. おわりに

1998年1月10日、TVで「職人千年・商売元年—中国・景德鎮市—」が放送された。改革開放が叫ばれるなか、景德鎮も重要産業都市と位置づけられ、外資導入を進めている。ここ数年、やきもののまちは一変した。既存の国営やきもの工場は、非効率や国内の産地間競争の激化などで苦しんでいる。なかには、リストラで従業員の大半が休職とか、給料の未払いなども起きている。他方で急増しているのが、個人経営の工場である。品質を維持しながら「売れる商品」を生産しようと、先進国の経営ノウハウを大胆に導入し、なかには百人単位で作業者を雇う大工場も現れているという⁽⁶⁸⁾。これは、小論を書き進めるなかで入手した情報に他ならず、景德鎮での企業見学の段階では、こうした状況を調べるまでには至らなかった。

2日半という一瞬の滞在で、やきもの産業を中心に景德鎮の現代像を描くことは、門外漢の筆者にとって無理極まりない。しかし、幾つかの出会いが、景德鎮の現代像についてまとめておくことの大切さに気付かせ、また逡巡するわが背中を押してくれた。

まず、2002年景德鎮市視察交流団の一員として参加した訪問先の見学や説明、入手資料、ガイド通訳のフォロー、そして団員の方々による折々のちょっとした指摘などが、有難い。こうした現場での直に見聞した情報は、得難く貴重なものに感じられ、筆者の興味を大いに刺激する。また、景德鎮および上海では、優秀なガイド通訳（女性）に恵まれ、彼女たちが詳細に語る両市のホッ

トな姿は、景德鎮を上海との比較視点を通して捉える面白さにも気付かせてくれた。

帰国後に入手した幾つかの文献も大いに役立った。1997年の景德鎮視察訪問報告書は、2002年の視察交流に比べて、ほぼ倍の参加者（陶磁器関係者に絞ると数倍）、倍以上の訪問先が記録されている。今回の視察訪問をカバーするだけでなく、2002年と1997年の視察訪問をめぐる比較考察が、やきものを中心とする景德鎮の最新像を理解する一助になった。また、小論を書き進める中で、1978年に景德鎮を訪れた陳舜臣の紀行（『中国やきもの紀行 景德鎮』）に邂逅する。景德鎮を中心に、中国2千年のやきものの歴史を、現代的な視点から捉えたものである。その深い知見は、小論をまとめるうえで知的な支えになった。

注

- (1) 陳舜臣『中国やきもの紀行 景德鎮』平凡社、1979年、7-11ページ。
- (2) 同上、75ページ。
- (3) 同上、21ページ。
- (4) 同上、41ページ。
- (5) 加藤卓男「私の履歴書²⁸」日本経済新聞、2002.4.29
- (6) 三杉隆敏『やきもの文化史—景德鎮から海のシルクロードへ—』岩波新書、1989年、64ページ。
- (7) 加藤卓男「私の履歴書²⁸」日本経済新聞、2002.4.29
- (8) 三杉隆敏、前掲書、1989年、52-56ページ。
- (9) 陳舜臣、前掲書、251-2ページ。
- (10) 同上、218ページ。
- (11) 同上、246-53ページ。
- (12) 三杉隆敏、前掲書、56-57ページ。
- (13) 陳舜臣、前掲書、238、247ページ。
- (14) 三杉隆敏『マイセンへの道—東西陶磁交流史—』東書選書、1992年、63-64ページ。
- (15) 林景悟・馮雲龍『高嶺 かおりん』山内達彦編訳、サンケイ出版社、1995年、1ページ。
- (16) 鄭榮輝他編『景德鎮—発展中的の外交型経済—』江西省景德鎮市対外文化交流協会、1992年、15-16ページ。
- (17) 同上、21-22ページ。
- (18) 同上、39-40ページ。
- (19) 同上、47-48ページ。
- (20) 同上、61-62ページ。

- (21) 陳舜臣, 前掲書, 13 ページ。
- (22) 同上, 245, 249-50 ページ。
- (23) 同上, 32 ページ。
- (24) 三杉隆敏, 前掲書 (『やきもの文化史—景德鎮から海のシルクロードへ—』), 65-66 ページ。
- (25) 米本敬治「景德鎮～上海 龍が動き出した—仰天!! 中国見聞記②—」日刊とうめい, 2002 年 5 月 24 日付。
- (26) 景德鎮市幹部との会見での秦錫麟 景德鎮陶瓷学院長の説明による。
- (27) 景德鎮市および上海市の昼休み時間については, それぞれの現地ガイド通訳の説明による。
- (28) 景德鎮市幹部との会見での許愛民景德鎮市長の説明による (瀬戸商工会議所『景德鎮市への視察交流団報告書—創立 55 周年記念事業—』2002 年)。
- (29) 米本敬治「景德鎮～上海 龍が動き出した—仰天!! 中国見聞記②—」日刊とうめい, 2002 年 5 月 24 日付。
- (30) 鄭榮輝他編, 前掲書, 69-70 ページ。
- (31) 陳舜臣, 前掲書, 126 ページ。
- (32) 景德鎮陶瓷学院に関しては, 同学院を訪れ秦錫麟学院長からヒアリングしたものである。なお, 1997 年の『景德鎮視察訪問報告書』(前掲)によると, 同学院は 4 つの学部の中に 15 の専門コースがあり大学院も設置されているとあり, 大きく改編されたことがうかがわれる。
- (33) 陳舜臣, 前掲書, 215-7 ページ。
- (34) 作業ポイントについては, 1997 年の『景德鎮視察訪問報告書』(前掲)による。
- (35) 作業工程の状況に関しては, 1997 年の『景德鎮視察訪問報告書』(前掲)に基づく。
- (36) 陳舜臣, 前掲書, 139-40 ページ。
- (37) 同上, 84 ページ。
- (38) 同上, 164 ページ。
- (39) 同上, 193, 199 ページ。
- (40) 同上, 246 ページ。
- (41) 瀬戸商工会議所『景德鎮市への視察交流団報告書—創立 55 周年記念事業—』2002 年。
- (42) 陳舜臣, 前掲書, 126 ページ。
- (43) 同上, 51-3 ページ。
- (44) 同上, 57-60 ページ。
- (45) 同上, 203-5 ページ。
- (46) 同上, 230-2 ページ。
- (47) 上海のガイド通訳からの説明による。
- (48) 陳舜臣, 前掲書, 34 ページ。
- (49) 愛知県陶磁器工業協同組合『景德鎮視察訪問報告書—瀬戸市・景德鎮市友好提携記念交流事業—』1997 年, 21 ページ。

- 50) 陳舜臣, 前掲書, 15 ページ。
- 51) 米本敬治「景德鎮～上海 龍が動き出した一仰天!! 中国見聞記②」 日刊とうめい, 2002 年 5 月 24 日付。
- 52) 若林敬子・荒井直子「上海市における人口問題」, 植田政孝・古澤賢治編『アジアの大都市 [5] 北京・上海』日本評論社, 2002 年。
- 53) 上海のガイド通訳 (女性) からのヒアリング (2002 年 3 月) による。なお, 彼女から聞いた「小皇帝」という呼び方は, 日本経済新聞 2002 年 6 月 20 日付でも, 小見出しで取り上げられている。
- 54) 上海のガイド通訳からのヒアリングによる。
- 55) 「中国 一部都市, 統計超す豊かさ」日本経済新聞, 2002 年 6 月 20 日付
- 56) 上海のガイド通訳からのヒアリングによる。
- 57) 上海のガイド通訳からのヒアリングによる。
- 58) 同上。
- 59) 米本敬治「景德鎮～上海 龍が動き出した一仰天!! 中国見聞記③」 日刊とうめい, 2002 年 5 月 25 日付。
- 60) 日本経済新聞, 2002 年 6 月 20 日付。
- 61) 上海のガイド通訳からのヒアリングによる。
- 62) 日本経済新聞, 2002 年 5 月 28 日付。
- 63) 上海のガイド通訳からのヒアリングによる。
- 64) 日本経済新聞, 2002 年 6 月 20 日付。
- 65) 日本経済新聞, 2002 年 5 月 4 日付。
- 66) 中国ではかつて, 国有企業や政府が従業員や公務員のために住宅を建設し現物支給してきた。2000 年度までに住宅支給制度は全面的に廃止され, 個人が銀行のローン制度などを利用してマンションなどを購入する市場経済化が一気に進んだ。その結果, 住宅の年間販売面積は 1991 年から 2001 年の 11 年間に 7 倍近くへと急拡大した。このうち個人による購入は全体の 94% を占め, 市場規模は 4 千億元に達している (日本経済新聞, 2002 年 5 月 6 日付)。
- 67) 日本経済新聞, 2002 年 5 月 29 日付。
- 68) <http://www.nhk.or.jp/asia/old/past/pasj1001.htm>

参考文献

- 植田政孝・古澤賢治編『アジアの大都市 [5] 北京・上海』日本評論社, 2002 年。
- 陳舜臣『中国やきもの紀行 景德鎮』平凡社, 1979 年
- 陳舜臣『景德鎮の旅 中国やきもの紀行』講談社文庫, 1991 年
- 鄭榮輝他編『景德鎮—発展中的の外交型経済—』河西省景德鎮市对外文化交流協会, 1992 年
- 三杉隆敏『マイセンへの道—東西陶磁交流史—』東書選書, 1992 年
- 三杉隆敏『やきもの文化史—景德鎮から海のシルクロードへ—』岩波新書, 1989 年

- 林景悟・馮雲龍『高嶺 かおりん』山内達彦編訳，サンケイ出版社，1995 年
- 瀬戸商工会議所『景德鎮市への視察交流団報告書—創立 55 周年記念事業—』2002 年
- 愛知県陶磁器工業協同組合『景德鎮視察訪問報告書—瀬戸市・景德鎮市友好提携記念交流事業—』1997 年
- 上海万申置程信息技术有限公司『会社案内』2002 年
- 上海市旅遊事業管理委員会『上海観光案内図』2001 年 2 番目第 4 版
- 加藤卓男「私の履歴書②8」日本経済新聞，2002 年 4 月 29 日付
- 米本敬治「景德鎮～上海 龍が動き出した—仰天!! 中国見聞記①～⑤—」日刊とうめい，
2002 年 5 月 23，24，25，28，29 日付
- 藤賀三雄「中国 住宅購入ブーム」日本経済新聞，2002 年 5 月 6 日付
- 下原口徹「中国，消費大国の予兆」日本経済新聞，2002 年 5 月 28 日付
- 小林英夫「上海経済—国際金融・物流・貿易の中心に—」日本経済新聞，2002 年 5 月 29 日付
- 下原口徹「中国 一部都市，統計超す豊かさ」日本経済新聞，2002 年 6 月 20 日付